

今年は五日より舉行、六日には殊に優勝馬に對して帝室の御賞典が有り、御名代の名として竹田宮殿下が成らせられたので、二日目の競馬は近頃稀な賑を呈し殆んど馬券發賣當時の面影を偲ばしめたと云ふことで有る。

くらべ馬おくれで一騎哀れなり
よき乗手また出てゐるや競馬
若しの、江戸旗掛や競馬
子規
碧梧桐
同

帝大の運動會 (十一月中旬)

例に依りて例の如く、年は變れども年々歳々、番組も競技の方法も競技を見る人も、殆んど相同じと云つたやうな風で、而も相も變らず盛に行はれる。各若宮殿下を始めとして官公私の大專門學校生市内各中學の生徒は勿論のこと、貴婦人令嬢などがひし／＼とつめかけて、廣くもあらぬ運動場の周圍はまるで人の山をさづき、満都の人氣は宛がら此處に集められたらん如く有るが、可笑しいのは、本家本元の大學生の出席するもの少いことで、中には三年乃至四年の在學中に於て、一度も此運動會を見ずして卒業して了ふものは殆んど數へ切れぬ程有るので有る。

他處の運動會とちがつて、此處の運動會場は裝飾と云つては殆んど皆無で有るが、此處には二千米突徒步競争だとか、時々世界のレコードを破ると云ふやうな高飛とか棒飛とか、選手一科七名宛で七周して勝負を決し、法醫工農各分科の選手二十八名によりて行はる、團體競争、金色燦爛たる優勝旗を授くる市内各中學選手競争など、至つて景氣のいゝものがある。そして市内運動會中の賑はしもの、一つに加へられて居る。

學習院女學部開校記念式 (十一月十三日)

其昔華族女學校と云はれた三宅坂上の姫様達の學校は、四五年前から名前が變つて學習院女學部と稱せられて居る。此學校の開校記念式は例年十一月十三日に舉行せられ、時にはやんごとなき方々のお成が有り、今年には皇太子妃殿下が行啓有つて、花々しい式が行はれた。

式と云ふのは二つに分れ、先づ小學科及幼稚園の記念式が有り、『君が代』について可愛い姫様嬢ちやん達の談話、唱歌、手工、朗讀、對話などが有つて、やがて専修科及高等女學校に相當する中學科の記念式が有り、『金剛石』の唱歌について、朗讀、唱歌、洋琴、談話、理科實驗、箏などの演奏があるのが例で有る。

尙此日にはいつも女學部卒業生全體から組織された同窓會常盤會と云ふのが同校の階上に於て催さるゝが例で有る。

七五三の祝 (十一月十五日)

昔は十一月十五日以後此月一ぱいは、七五三の祝と云つて、七歳に五歳に三歳の兒女を着飾らし、吉日を選んで産土神へ詣でたもので有るが、近頃はそれが十五日一日に限られて居る。

詳しく云ふと七五三の祝と云ふのは、髪置、袴着、帯解の三つで、髪置は男女三歳の時首飾にて白髪を作り、小兒を吉方に向はせて之を冠らせ、櫛にて右左の髪を三かき宛かく真似をする祝にて、袴着は男子五歳の時、碁盤の上にて袴を着せる儀式、即ち歩みながら袴を着ける癖を防ぐ仕方にて、昔は女兒にも此儀式が有つたと云ふ。帯解と云ふのは女兒七歳の時、附け紐を取除き縫帶をしめる祝で有るが、今は嚴重な儀式を行ふのは殆んどなくして、只宮詣り丈が盛に行はるゝので有る。徳川の末葉までは、此外に今も行はるゝヴェールのやうな帔衣をも、五歳或は七歳の女兒に始めて着せる帔衣初の祝と云ふものもあり、何れも十一月に此祝を行ふこととなつたのは、室町時代よりの例と云ふ説が有るが、それは果して如何で有らう。



現時東京市中に於て七五三の祝に参詣者の最も多きは、麴町日枝神社、神田明神、深川八幡、向島牛島神社、赤坂氷川神社、芝大神宮、浅草三社などで有るが、就中最も賑ふのは云ふまでもなく日枝神社と神田明神とで有る。そして此二つの参詣者の間には、所謂山の手の風と下町の風とが著しく分明りと現はれて居て、屋敷町と商人町との味が最も面白く見分けられるので有る。

試に此二三年の流行はどんなものかと思つて、祝着の一番綺麗なのはどうしても七歳の女子で、地質は矢張縮緬に止めをさすので有るが、有職風流行の結果として、古風な地紋のある紋縮緬も中々用ひられて居る。色は近年流行するのは藤色系統で、子供向としては色の濃いもの即ち紅かけ藤、藤葡萄、牡丹紫、紫紺、桔梗杯が一番にて、又襷紅色、襷朱色もなかく流行して居る。模様は光琳風が廢つて有職風の流行となつたが、子供向は矢張四季の花物で、季節柄として菊が最も多く、殊に近頃は裾模様と共に袖下模様が多くなつたやうで有る。そして下着は上着と照應の好い無地のもの流行し、色は紅、襷紅色、オレンジ、肉色杯最も多く、中には派手な鴉色、薄萌黄地の紅入り友禪を好む者もあり、従つて模様にも奇抜なのは、裾模様に止めずして肩から袖に及び、又上前と下前と全然變つた模様を付けたのもある。それから紋は五ツで大きさは普通が八分、長襦袢は緋の紋縮緬又は金糸入の緋縮緬、帯は地質としては絲錦と唐織が動かぬ處で、高浪の唐織は近年の流行であり、模様は高雅で

重みのある有職風の花模様が一番勢力を占めて居る。扱帯は鬱金、赤、白、朱鷄又は鶯色の紋縮緬か紋縮緬みで兩房ものが歓迎されて居た。

それから五歳の男児の服装としては、地は羽二重、斜子、又は紋縮子が普通で、色は黒が七分他の三分は勝色、熨斗目花色又は紫紺などで、紋は五所と決つて居る。下着は白茶、クリーム、薄卵色又は白にて、羽織は上着と同質同色、紋は五ツ、紐は白の丸打、帯は厚板、縮珍、博多、紋博多などで、縞類は廢り紋柄が流行し、袴は仙臺平、博多平、又は縮珍、襦袢は縮珍、博多、縮珍などで、水兵形すたつて襷付春廣のステンカラーと云ふ詰襟の折返つたもの、流行となつた。ズボンは無論半ズボンで、地質は薄羅紗、色は薄茶色の霜降り又は濃紺、縹茶、鼠色などが喜ばれ、大柄のスコッチも奇抜で快活に見える所から、随分廣く見受られた。

そして七歳の女子は多くは稚兒留、三歳の女兒は垂鬘と云ふが普通で有るが、七五三の祝挿として先づ前挿に限つたもので、此二三年の流行はツマミ製にて、菊の十二輪から三十輪迄を二段乃至三段としたもの、其上は平戸細工の七寶流し込みで蝶づくし、菊よせ、杯である。更にそれ以上の上等となると、四方張で花よせ、菊よせ、四君子杯の模様で、價は十四五圓位。箱セコは普通本金厚板織で、赤色九分の外は紫と紺色で鎖付である。上等は鹽瀬の縫取、紅葉の賀、籬の菊、羽衣、光琳風の

籬で、リボンは朱鷄、納戸、褪紅色の三段模様が最も流行し、履物は嬢さん向として朱塗蒔繪臺で、縮珍の鼻緒又は新天染模様表の千代田草履がもてはやされて居た。けれども三歳の女兒になると服装は大抵が間に合せもので、重に友禪位に、赤地絲入の帯などで済すのが多かつた。

ところで最近に至つて殊に眼立つて来たのは、これまでは、兎も角も山王に參詣するものは大體に於て山手趣味を代表し、明神に詣でるものは下町趣味を發揮するが例で有つて、兩方の間に判然とした傾向が見られつゝ有つたので有るが、近頃になつて其間に殆んど差違が認められなくなり、殊に下町あたりには於ては、町家の供詣りに無かるべからざるもの、一つに數へられて居つた、千歳飾の袋を肩にした出入りの爲の革羽織が、殆んど影を見せぬやうになつた事と、お宮詣をするもの、數が年々に増加して来たことと云ふこと、で有る。現に神田明神などは參詣するもの、數が毎年五十組宛位は殖えて行くことと云ふことと有る。

斯くして有らう限りの力を盡して飾られた可愛らしい男の子女の子は、母や姉などに手を引かれて朝からお宮詣をするので、之を見やうとして集まるもの亦夥しく、神田明神の如きは午過には二萬など云ふ人の群が集ること決して珍らしきことにあらず、殊に呉服店や染物屋の番頭手代などは勿論、時には京都の友禪染屋までが態々出京して、此日の祝着の調子を見て、來ん年の流行の芽出

しを捜さんものと、お職掌柄とは云ひながら鶴の目鷹の目で有る。されば此人出を當込んで色んな賣物屋は神社の境内や馬場の兩側にずらりと店を並べるが中にも、例の縁喜物なる千歳館屋は最も繁昌し、よちくと漸く歩けるやうなのが丈にも餘るやうな長いのを下げて、ニコくとして居るのも可愛い。そして何處の神社にても、参詣の祝ひ兒には一々神符を授け神酒を與へて其前途を祝福するので有るが、一滴二滴の神酒も積らば大きなものにて、神田明神の如きは年々四斗乃至五斗の味淋酒を費すと云ふこと有る。

髪置や門通る子も見られけり	景	道
髪置や穂領の甚六にて候	子	規
髪置や母なくて育つ子の淋し	松	濱
髪置や田舎源氏の花の君	東	洋
袴着は娘の子にもはかまかな	其	角
袴着に宮士見せ申す恭盤哉	鳴	雲
袴着や殿しき腹も武家育ち	稻	青
袴着や竹千代殿のお附人	夏	風

袴着や我が日の本は皇國	秋	航
帯解やうしろくを筒井筒	旨	原
帯解や坐れは坐る姉妹	白	香

観菊御宴 (十一月中旬)

濱の離宮に於ける観櫻の御宴に似て、秋酣にして赤坂離宮御苑にて催さるゝものは観菊の御宴で有る。御催のあるは十一月中旬頃、此日雨天の節は御止となる定なれども、観櫻御宴の御催しなかつた年には、翌日の天氣次第にて御催しおらせらるゝが例で有る。

陪観陪宴の許さるゝ人々は観櫻の時と同じことで、文官は通常禮服高帽武官は其相當服、婦人は并ジチング、ドレス或は袴袴にて午後二時に参苑し、式部次長の接伴にて僊錦の間脇御苑を経て青山御苑に入る。兩陛下には此時宮城出御、遊幸の鹵簿御一行幸啓、萩の御茶屋へ臨御、御休憩の後御花苑へ出でさせられ、菊御覽の後、花苑の後ろに設けられた假立食所に入らせられ、御陪観諸員へ御會釋ありて立食の酒饌を賜はるので有る。

からして各員御花苑に入る頃より退散に至るまで、式部陸軍近衛樂隊の交るゝ奏樂することは観櫻の御宴の時と同じく、其他御宴のあつた後兩三日中に於て市内各新聞社通信社社員二名宛を限つて御花苑拜觀を許させられることも観櫻の時と同様で有る。

御苑の菊

序に御苑に於ける菊の種類や、之が栽培の模様などについて承ると次のやうな語が有る。

元來宮中に於ける菊の御仕立場は、青山御所内の赤坂御苑と、宮城内紅葉山御苑の二花壇にて、赤坂御苑のは重に裝飾用の切花物に、紅葉山御苑のは主として裝飾用の盆栽に用ひらるゝもので有るとか。そして紅葉山御苑の御花壇には小上屋を設け、大作りの菊を栽培しあり、それが皇后陛下の御座所に近く設けられてあるので、陛下には朝夕の御眺めに興じさせ給ふは勿論、御局女官連も暇あれば此處に逍遙してとり／＼の品定めを試むるが常にて、殊に御花壇の周圍は細かなる黄菊にて垣根を設らへられることになつて居るので、落葉一つ残さぬ閑庭の風致優雅を極めたもので有るとか。

それから赤坂御苑で菊の培養を始められたのは明治十四五年の頃からで、其年の氣候又は御苑の都合に依つては或は一部を新宿御苑に移して栽培し、御宴間近になつて更めて赤坂御苑に引戻す例しもあると云ふが、其種類と仕立方とについて漏れ聞く所によると、御苑内丸山仕立場の花壇は、上屋を半ば木造とし、優美なる屋根障子を懸け、瀟洒なる源氏欄を設け、大菊、中菊、嵯峨菊、一文字菊の四種をば此處に大作、鬚刺、箒作といふ三つの作り方にするのでと云ふ。

大作とは所謂千輪咲の事にて、御苑内聚芳亭一名萩のお茶屋のほとりに、毎年三株は鉢、三株は花壇に仕立て、そして其株の高さは六尺以上、左右の幅は一丈二三尺、花の数は八九百を以て是迄の御嘉例となし來つたとか。それから鬚刺とは中央に一本棒を立て、枝を釣るといふ京都地方の作り方の事にて、箒作とは東京地方でするやうに一株毎に地から棒を立てるので有る。

それから御紋章菊と云ふのは所謂一文字菊の事にて、十六瓣を有して居る處から民間の尊重一方ならぬ花である。素と京都地方の専有とも稱すべき種類にて東京では培養頗る困難であつたのを、福羽内苑寮頭種々に苦心して漸く栽培上の好成績を得、明治卅八年を以て始めて御苑内に仕立てた處が花の徑一尺もある天下の絶品を得るに至り、毎秋數百株づゝ御苑内圓山の丘を飾ることになつたので有る。

嵯峨菊は細瓣の捲いて管をなして居るもので、實は伊勢種と嵯峨種との二種あるのを今は一樣に嵯峨菊といつて居る。是れも初め福羽内苑寮頭の栽植したるものにて、婉麗閑雅えもいはれざる色に富

み香に秀でつゝ、秋毎に遷錦閣の丘を飾つて居る。

一輪作は大菊性のものにて、一文字菊を始めとし厚物、間管、太管、細管など皆之に屬して居る。萩のお茶屋のほとりに栽培されて、後ろは高く五尺以上の丈に伸び、前は低く三尺許りに作られて、黄白紅紫數段の霞を疊んで居り、その麗はしさは主に厚物の種類であるとの事である。御苑にては又た實生ものを以て斬新の花を咲かせる事を努めて居るが、是れはなかく逸品の少ないのと、其花の變化し易いとの爲め、大抵三年の後でなければ花容色澤の配合上植込みの宜しきを得がたいと云ふ話で有る。

斯うして寮頭を始め係官の丹精によつて咲き出づる菊は、毎年その爛漫の頃に於て天覽仰せ出でさせられると同時に、臣下を召して觀菊の御宴を賜はるの御例であるが、之とは別に内苑寮の人々は御苑内にて取分け美事なる花をば特に御鉢植として、宮城なる御座所近くに移し参らせ、御政務に勞させ給ふ大御心を慰め奉るを例とし、女官の方々も亦たその心を得て毎朝陛下の御寢殿を出でさせ給ふ前に、御鉢に水を注ぎ塵を拂ひ御座下近く進み参らせて、二三日を経る毎にまた他の新しい御鉢を天覽にそなへ奉るとの事である。

御免札と櫓

相撲協會では、十一月一日、明年一月春場所角力興行の出願をなし、認許となれば此月の初酉の日を以て御免札を兩國の橋杖と國技館前に建て、協會の樓上では御免祝と云ふものが有ることは、夏場所の前と同様で有るが、若し初酉の日が十日前にて早過る際には、これを二の酉に廻すが例で有る。ところで何故に一月場所の豫告を此座に早くからするかと云ふと、其以前今の一月場所は十一月に興行されたもの。換言すれば一月相撲は昔の十一月の所謂暮れ相撲の延びたものにて、出願文が昔のままに行はれて居るので有る。それから暮の二十五六日頃までは力士は大抵地方巡業より歸京し、十二月の二十八日頃になると、東兩國には春場所大相撲の櫓が立てられるので有る。

序に古式の祝宴の模様と云ふのを少しく述べて見ると、協會の大廣間の床には野見宿禰の幅をかけ、座敷の中央には三合、五合、七合入の大銀盃御紋章ある三つ組木盃の外に久しい昔から度々の御免祝につかつた一合樹と、分銅型の盃とを三寶の上に飾り、正午勸進元を正面に、右手には理事年寄、左手には相撲記者参列し、木盃と樹と分銅とにて神酒が三巡してから、理事が皆さんお手を拜借で、シヤン／＼シヤンと目出度手打を行ふと、今度は相撲茶屋二十軒の主人や女將連が「おめでたう／＼」

と云つて二階へ上つて来て、理事を中心に圓形をつくる。と樹と分銅に神酒を汲むこと前の如くし、引つゞき七合人の大銀盃に満々と冷酒をついで、茶屋二十人がぐいぐいと飲み廻はす。それが一巡半位で飲干されるが普通なるが、時あつては一巡を終らぬうちに盃が干されて了ふことが有る。すると『それは買切のしるしで、春場所は大入疑ない』とあつて非常に喜ばれる。兎角にかうして縁起を祝つて、更に手打の式が有る。

これにて所謂祝の古式は終らるので有るが、膳の上に連なる縁起ものとしては、大入をかきこむ酢牡蠣、豆腐、客を山盛の赤飯に芝海老其他の煮しめなどが並べられるに決まつて居る。

中山法華經寺の會式 (十一月十五、六、七日)

池上や堀の内のお會式に後れて、十一月十五日から四日間、兩國と千葉との真中あたりにある中山法華經寺のお會式は行はれる。

停車場から山門まで約十町の間の兩側には名物の蕨餅や、おこし、おでん、そばなどの出店は勿論、古下駄、古靴、古帽子、古着から、箆筒、長持荒物などの霞籠圍ひの店までがずらりと並んで、近郷近在の人の集まることは夥しい。そして前晚には客殿と云はず拜殿と云はず、幾千の色んな講中の善

男善女がお堂もくづれよと計りに團扇太鼓をたゝいてお籠りをする。中には眞暗な本堂の中で、金切聲の若い女の音頭につれて手拍子足拍子揃へて踊り出す若い男女も一組や二組に非ざるを見ては、突出しの客殿に詣をつけたやうになつて籠つて居る婆さん達も黙つては居られず、六十越しても此通りと云はぬ計りに、メリンス友禪の長襦袢ひらめかして、鉦と太鼓と三味線にまで合して、『何ちうマア汚ねい子供だらう、マア小便は垂れ流し』と*



云つたやうな、變なお國訛りの文句を入れて唄ひつゝ踊る程に、一山悉く浮れ出して團扇太鼓の音は愈調子づいて来る。これが所謂中山名物の歌題目と云ふので有る。さうする内には彼處でも此處でも、嫁も婆さんも悉く向鉢巻に尻からげと云

夜寒の身をゴロリと横にするやせぬ頃には、もう夜明の空が白みかゝると云ふ有様、それは中々變つた賑で有る。

今年(こんねん)は三日の間(あひだ)毎日(まいにち)百餘名(ひゃくじゆなひ)の稚子(わらこ)の練込(ねりこ)みあり、上野(うへの)日暮里(ひぐり)兩國(にこく)等各驛(ごうせき)よりは、十數回(じゆじゆかい)の臨時(りんじ)列車(れっせん)か増發(ぞうはつ)せられたので有つた。

中山(なやま)や狂女(きやうにょ)もこぞる御命講(ごめいこう) 子規(しき) 一ト里(いちり)は霜(しも)に大鼓(おほづ)や御命講(ごめいこう) 古泉(こせん)

秋香會の菊花競技

今は故人(こじん)の會禰荒助(せねあらいすけ)氏(し)やら、毛利五郎(もうりごろう)氏(し)などが中心(ちゆうしん)となつて、名門(めいもん)華胄(けわ)の間に菊(きく)の培養(ばいよう)を目的(もくてき)とする秋香會(あきか)と云ふものがある。會員(かいゐん)の數(かず)も中々(なかなか)に多く、年々(ねんねん)八王子(やちおうじ)や横濱(よこはま)あたりの支部(しぶ)に於(お)ても盛ん(まか)な開花會(かいけ)と云ふものが催(もよほ)されて居(ゐ)る。試(こころみ)に此年(このとし)の開花會(かいけ)の日取(ひどり)と云ふのを舉(あ)げて見ると

十一月(じゅういちがつ)十六日(じゅうろくにち)秋香會(あきか)八王子(やちおうじ)支部(しぶ)、同(どう)十九日(じゅうきゅうにち)立川(たちがわ)氏(し)青山(あやま)菊花(きく)競技會(けいぎ)會(かい)、同(どう)二十二日(じゅうににち)毛利(もうり)男(おとこ)邸(てい)に於(お)て、秋香會(あきか)大開花(おほいかいけ)會(かい)、同(どう)二十六日(じゅうにじゅうろくにち)知事(ちじ)官邸(くわんでい)にて横濱(よこはま)秋香會(あきか)支部(しぶ)開花會(かい)。

向島秋葉神社祭 (十一月十七、八日)

此日(このひ)の午前(ごぜん)八時(はつじ)頃(ころ)積重(つむか)ねた松割木(まつわりぎ)に火(ひ)を點(てん)じて神主(かみぬし)さんが鎮火(ちんか)の神下(かみか)ろしの式(しき)を行(な)ふ、之(こ)れが即(すま)ち鎮火祭(ちんかさい)で有(あ)る。本所(ほんじよ)の區長(くわうちやう)や區民總代(くわみんそうだい)を始(はじ)めとして赤坂(あかまか)、吉原(よしかはら)、龜戸(かめと)などの講中(かうちゆう)がぞろぞろと押(お)かけて、難有(ありがた)さうに火防(ひよせ)の御幣(ごへい)や火難除守札(かたなげまもりふだ)を戴(いた)てて行く。午後(ごご)には大太神樂(おほおほがら)茶番(ちやばん)などの餘興(よきやう)が有(あ)るが例(れい)で有(あ)る。

一茶忌 (十一月十九日)

一茶(いち)の忌日(きじつ)も、其角忌(きかく)や芭蕉忌(ばせう)などのやうに、近頃(ちかごろ)は取り立(た)て、記念(きねん)さるゝでもないが、蕪村忌(うらむら)や其他(そなた)の俳人(はいじん)の忌日(きじつ)同様(どうよう)に、矢張(やは)張連座(ちやうれんざ)などで偶然(ぐうぜん)句題(くわだい)になり話題(わだか)に上(あ)る位(くらい)に過ぎぬらしい。が此(こ)んな風(ふう)のものは盛(まか)んに再興(さいかう)して成(な)るべく賑(にぎ)やかにして貰(もら)ひたいものと思(おも)ふ。

- 一茶忌(いち)に蕪(う)の風(ふう)もお供(とも)せよ 紅(べに) 綠(ろく)
- 一茶忌(いち)に各々(ごご)無事(むじ)で罷在(まゐ)る 碧(あざ) 室(むろ)
- 一茶忌(いち)に貧乏(ひんぱ)神(かみ)が上座(じやうざ)かな 三(さん) 九(く)
- 一茶忌(いち)に蕪(う)夢(む)うつ貧(ひん)の主裁(しゆさい) 末(すえ) 央(おう)

新嘗祭 (十一月二十三日)

にひなめまつりと云つて、此日宮中神嘉殿に於て、陛下親ら新穀の御初穂を皇神に奉り、また親らも聞食し、群臣にも賜はせ給ふ御祭典で有る。

先づ十一月十日伊勢神宮には勅使を、各官幣社及國幣社には地方官を遣はして、幣帛を頒たさせられ、十一月二十二日綾綺殿にて鎮魂祭を行ひ、聖上、皇后宮、東宮、同妃の御魂を鎮め、御運の長久ならんことを祈らさせ給ひ、二十三日、午後二時神嘉殿の御裝飾あり、四時より式部職員着床、ついで神座の御設けあり、五時四十分忌火の御燈を點じ、各所に庭燎を焚かせられ、六時親王以下諸官着床の後、陛下出御、隔殿の御座に着御せられ、神饌の行立、神樂歌などあり、更に陛下本殿の御座に進ませられて、御手づから神饌の御供へあり、御告文を奏し給ひて、やがて御直會酒と云つて、各府縣の有志者より獻納した米と御苑の産とを混じて、造らせられた白酒黒酒を聞き召されついで神饌を撤すれば陛下入御、かうして夕の御祭典が終れば、翌二十四日午前一時に至りて、掌典長神座以下を檢め、やがて陛下出御、神饌行立以下夕の儀式と同様のことを行はせられ、賢所皇靈殿神座の御祭典は二十三日内掌典をして行はさせ給ふので有る。

此祭典は古く神武天皇即位の元年に行はれたと云ひ、或は景行天皇の御時既に行はれたと云ひ、爾來幾度となく中絶したるを、明治元年新嘗祭の布告あり、其後多少の變遷ありて、廿二年以後神嘉殿

に於て行はせられることとなり、宮中行事中極めて嚴重なるものとせさせられて居る。

尙ほ明治二十五年四月、時の東京府知事富田鐵之助を始め、各府縣知事四十六名より、新嘗祭の供御を獻せんことを願ひ出で、御嘉納せられ、其後十月の末各府縣の有志者より、年々精米一升粟五合宛を獻納することとなり、それをも此お祭の供御に奉らるゝことになつて居る。

東西本願寺法恩講

(東は二十二日——二十八日) (西は二十四日——二十八日)

十一月二十八日は弘長二年歳九十を以て入寂した真慈上人の正忌日で有る。真宗の諸寺にては大抵一週間前頃から佛事を修するが中にも、京都東西本願寺の報恩講が最も盛で有る。東京にては京都東本願寺の輪番所たる淺草松清町の東本願寺別院と、西本願寺の輪番所たる築地四丁目の西本願寺別院の報恩講が最も盛で有つて、善男善女の參詣は實に夥しいもので有る。尤も淺草のは廿二日から二十

八日の正忌日まで行ひ、築地のは二十四日から二十八日まで行ふことになつて居る。殊に東本願寺別院の報恩講は或はお番講とも云ひ、或は信徒の青年男女が將來僧老を契るべき婿や嫁の選擇所とせられて居る所からお見合講とも云ひ、最も盛であつた江戸時代に於ては、老若男女を問はず、御講衣と稱して衣服を新調し、美しく着飾つて、女子は頭に黒く薄き角隠しを戴き、男

子は肩衣の巾狭さを着し、廿七日の朝まだきより門前に群集し、開門を待つて本堂に押し懸け、中には前夜より講部屋に宿泊して参詣するものあり、却々に盛んなもので有つたと云ふ。近頃に至つて此風漸く頹廢したりと雖ども、今に至る迄信徒中の熱心者は正月の晴れ着を御講に新調し、娘を着飾らせて参詣するもの少からず、殊に二十七八兩日の午後の美観は素晴らしいものにて、寺の境内は露店商人や大道藝人まで詰かけて今も昔も變らぬ雑踏を極めるので有る。

尙報恩講のことは或はお霜月、御講又は御佛事とも云ひ、其頃天氣概して快晴な所から、御講風とか御講日和など云ふ語が有る。尤も上人の忌日に先ちて忌日法會を行ふのには、即御取越の名がついて居ることは一般に知られたことと有る。

御佛事	や	是も	他力	の	納豆汁	重	平
御佛事	や	牛盗人	も	聲	に出る	一	方
御取越	鮎	て	餅	く	ふ	咄	し
佛燈	の	丁子	の	花	や	報恩講	茶
只た	の	め	壺	漬	の	石	も
御取越	堀	も	他力	の	生	殘	り
五	露	山	工	月	山	茶	方

よき	風	や	せ	四	せ	東	せ	取	越	醉	佛
新	發	智	に	惚	れ	し	女	や	せ	取	越
築	地	派	の	御	講	淋	し	や	普	請	中
子	君	暹	子	規	子	規	子	規	子	規	子

除 隊 (十一月二十六日)

以前はもつと押つまつて、二十九日か三十日頃に行はれたやうで有るが、今は一日早ければ一日の食料丈利益だとあつて、大抵二十五日に除隊式が有つて、二十六日の早朝には籠の鳥が開放されるやうに、満期兵が除隊されるが普通で有る。

まだ日も昇らぬ先から方々の營門の前には出迎人が群がつて、今かくと時の至るを待つて居る。「何々君驛迎」など、黒紫赤と思ひくりに染め出した旗を朝風に翻らせ、中には樂隊まで連れて來て居るものもある。六時半の起床喇叭を合圖に、二年振りの和服に著かへるものもあれば、劍をつらな兵隊さんになつて、七時半頃になると、名殘惜しげに愉快さうにわと振り返りく門を出て行く。出迎人の間に萬歳の聲が起る、出て來るものもく、似たやうな顔ばかりの間に、やつと我子を見つけて大聲で名を呼ぶ、我を忘れて馳け寄つて握手をする。門の側まで送つて來た中隊長の中には、二

年の間親しく訓育した一同との別離の情に耐えぬもの、如く、名残を惜む握手までして、去り行く彼等の後を久しく見送るやうなものもある。送らるゝものは喜色満面に溢れながらも、久しい間親しくして居つた友と別れる瞬間となつては、流石に謂ひ知らぬ美はしい涙を浮かべて居るものも多い。かうして勇ましい盛んなうちにも、入營の時とちがつて何となくしんみりとした所がある。

砲兵の聯隊や輜重大隊、殊には騎兵聯隊では、上官や同輩とばかりではなく、他の兵營では見られぬ變つた別離がある。朝に夕に杖柱と頼んで親しみ馴染んだ愛馬との別離で有る。懐かしい名残惜しい別れの言葉を聲かい撫でつゝ云へども、相手は只ヒ、ンと許りにて、物言はぬだけに哀惜の情は一入勝るので有る。その上に『永年御苦勞でした』と上官の丁寧な挨拶でも有ると、愛馬との別離に泣かされた一同は、又しても涙が湧き上つて、同輩に對しては最う碌々言葉も出ない。斯うして騎兵聯隊などの除隊の朝はまことにしんみりとした床しいものだらうな。

君が代は軍もなくて除隊かな	夢	人
似た顔の兵が出て来る除隊哉	望	東
除隊して細一反のあるじ哉	孤	村
祝言の日も定まりて除隊かな	青	楓

うき人は既に暮きて除隊哉

雲天

品川の千體荒神祭 (十一月二十七、八日)

三月と同じに十一月も大祭で有るが、賑ふのは矢張十一月の方で有る。

此神様はもと肥前鍋島家の守神、戦勝の神で有つたのを、維新の際鍋島家から此海雲寺へ預けたので、日本廣しと云へども荒神様は品川と肥前と二つしかないと云ふ話がある。

それは兎に角に信心家のお詣りは中々大したもので、午前四時頃に開扉、之について大般若經護摩焚上がある頃には、お厨子の交換や新規のお受の爲に、老若男女は群々と詰掛け、二十幾つと云ふ講中は各室に陣取つて赤飯の接待を受ける、さうして二日の間の焚出しは百俵近くにも上るのだらうな。

丁度四十三年の十一月の二十八日で有つた。此日も品川は荒神祭で非常に賑ふときいて、厨子と云ふもの、欲しさに、四時頃勤め先から銀座へ来て電車で飛乗つた。

品川の終點で電車を下りると、此處から最う人通りは多いもの、流石に品川は場末で有る。潮氣の交つた空気がいやにじめじめとして、凡ての色が鼠色である。一歩一歩進むに従つてどうしても東京とは思へなくなる。『ちや僕も行かう』と云つて、一處に來た瓊音氏も遂に耐らなくなつたと見えて、

「此處はもう君東京ぢやあるまいね、何だか東海道へ来たやうな気がする」と云ふ。テクル程に、途にお祭のやうな所へ来た。これは河童天王だかと思ひつゝも、賑かなのに連れて舞込んで見た。社の中では盛に熊手や八つ頭を賣つて居る。此は酉の市のやうだがなと思つて熊手屋に聞いて見ると「荒神様はまだ三丁ばかり先です、これは天王様です」と云ふ。

振ひいて見ると環音氏は一錢銅貨を投げて、恭しく天王様の前に頭づいて居る。「君ちがうさうですよ、今日は三の酉でしたね」と云ひながら、其處を出て又しても西に向つてブラリ〜と進む。町は次第に暗くなる。「何だか變だ、後の方ぢやないかしら」聞いて見やうか、何て聞いたら、のだらう「荒神様でいゝでせう」「いやあれ〜又明るくなった」と云つてからも、進むこと三丁許にして、漸う海雲寺と云ふについた。品川は矢張場末で有る。三丁が昔の三丁で有る。遠い〜。

寺の境内へ入ると最う暗くなつて、外は淋しくなりかけて居るが、本堂内はまだ人の影が盛んに動く。昇降口で厨子と云ふものは何處にあるかと聞くと、上らなければと云ふ。一錢の下足料を拂つて上つて見ると、何だか坐つて食つて居るもの、飲むもの、左往右往するものでなかくに騒々しい。「新規拜受所」と云ふ表札を見つけて、値段書をたよりに最低の「二十錢のを二つ下さう」と云つて五十錢銀貨を投げると、「ヘツ七十錢」と云つて、位牌入れのやうなものを臺の上に置いて暫くして「二十

錢のは賣切れです」と云ふ。二人はさまり悪げに黙つてすぐと逃げて行く。臺の上に置かれた厨子は其儘にしてある。何でもベンガラ塗、漆塗と、色々ちがつて二十錢から一圓二圓位まであるらしい。位牌入れのやうなものの中には、荒神様が入つて居ると云ふが二十錢と七十錢とでは餘りに差が甚しい。信仰心のあるでない、唯物好で出かけた二人はどうしてもそれを買ふ氣になれなかつた。

本堂の方へ廻つて見ると、大きな銅鋼の中で護摩だらう盛にいよして居て、その上へ厨子をかざしては一寸燻して、棚に上げて置く。交換する人や、新に請けた人は番號をたよりにそれを受け取つて行くので有る。二人はさまり悪さうに寺をぬけ出で、門口でガタ車に乗つて電車を飛ばした。淋しい町はこれから又一しきり人出があるらしい。ハイ〜と云ふ車夫の懸聲も大抵ではなかつた。車を下りると車夫が「最う少しやつて下さう」。

「はつくしよ」二人は急いで電車に飛乗つた。噓もつき時がいゝと五錢位にはなる。

十二月曆

一日 新兵の入營。

三日 此日より廿四日頃まで宮中の御煤拂。

東京年中行事

五日 納の水天宮。

八日 禪宗各寺蠟八の法事を行ふ。

△正月事始の日。

△納の薬師。

九日 三田魚籃觀音煤拂開帳。

十日 今明兩日大宮に關東第一の年の市立つ。

△納の金刀比羅。

十二日 今明兩日黒不動尊煤拂開帳。

十三日 淺草觀音煤拂開帳。

△湯島天神煤拂。

△昔此日江戸城の煤拂、其他多く此日に煤拂す。

十四日 今明兩日深川八幡年の市。

△泉岳寺義士討入記念祭。

十五日 此頃より大抵二十九日迄年賀郵便特別取扱を行ふ。

△大晦日まで耶蘇教三脚鍋出る。

△此頃より「例年の通ちんもち仕候」の看板方々に見え出す。

△此頃實所にて御神樂。

十七日 今明兩日淺草觀音年の市。

十九日 歩兵第一聯隊軍旗祭、軍旗は明治七年の此日授與されたるもの。

二十日 今明兩日神田明神年の市。

△博物館 本年限閉鎖、一月五日開館。

二十一日 納の大師。

△此日頃冬至にて市中の錢湯柚子湯立つ。

△此日頃よりぼつくと門松を立て始む。

△餅つき漸くさかる。

二十二日 今明兩日芝太神宮年の市。

二十三日 今明兩日芝愛宕神社年の市。

△此頃帝國議會開院式。

東京年中行事

二十四日 クリスマスの前晩にて各教會賑ふ。

△蕪村忌。

二十五日 クリスマス。

△今明 兩日 湯島天神、平河天神年の市。

二十六日 此日より三日間 鉾淵稻荷年の市。

△株式取引所、米穀取引所等納會、一月三日まで休業。

△忘年会 漸くさかる。

△新年の 新刊雑誌類 漸く店頭に飾らる。

二十七日 此日 両國國技館前に初場所櫓立つ。

二十八日 今明 兩日、日本橋藥研堀不動の年の市。

△納の不動。

△御用納にて一月三日迄休み。

△上野動物園 此日 限閉鎖、一月元日開園。

二十九日 此日より三日の内に百官有司 參内歳末御祝詞言上。

三十日 今明日、日本橋以南新橋迄、今川橋邊、上野廣小路、淺草雷門前、兩國廣小路、人形町、

四谷大通、牛込神樂坂、麻布飯倉四辻、赤坂表町其他要所、年の市。

三十一日 大祓△除夜祭△諸所の神社年越の祓△みそか蕎麥を祝ふ。

▲庚申 納の帝釋天。

▲甲子 納の大黒天。

▲亥の日 納の摩利支天。

▲巳の日 納の辨天。

▲寅の日 納の毘沙門。

新兵の入營 (十二月一日)

除隊に比すると何だか景氣のいゝもので、此日の朝の市中の賑は大したもののである。まだほの暗い頃から「送入營何々君」とか「祝何々君入營」とか、間違つたなりの變な文句で、入營の數日前から、軒先に立て飾られた幾十旒の幟を初冬の冷たい朝風に翻へし、中には樂隊などで囃し立てながら、父母兄弟親戚知友がぞろ／＼とあとをついて、何れも所定の營門眼がけて集まる。盛なものになると送

らるゝもの一人に、送るもの三十人五十人百人とあつて、六時七時頃までの混雑つたらない。それが餘りに賑やか過ぎる騒々し過ぎるとあつて、昨年で有つたか遂に當局者から、餘りに仰々しくせぬやうにとの殿そかな御達しが有つた位。本當に見るものは何だらう、まわ何て賑やかなことだらうと吃驚するやうなものも少からず、まことに勇ましい意氣込のいゝ心地のいゝもので有る。願くは出來得る限り其行を盛にして、墮落しかけた人の心を鼓舞すると同時に、尙武の氣象養成と云ふことに多少の資することがあらせたいと思つて居るのに、控へ目にしろくとは少しく野暮には過ぎまいか、物盛んなれば弊害の之に伴ふは數の免れざるところ。あんまり野暮くさいことは謂はぬが花ではあるまいか。

ところで市内又は附近に住まつて居るものは、斯うして盛に送られるが常なれど、近衛兵は遠く全國から集つて來るので到つて淋しい方で、中に地方によつて百二百と揃つて來るものは、揃ひの合羽に同じ運動帽子など云ふ變つたものもある。さて愈六時半頃に營門が開かれて、ぞろぞろと營内に入ると、健康診断が有る、所屬隊分けが有る。色んな滑稽よろしくあつて軍服に着かへがすむと、着て來た着物は見送人に渡される。さうして一先づ段落がつくと、十時頃から御眞影と聯隊旗が奉置して有る式場に入營式が行はれるので有る。

斯うして兎も角も形丈でも、サラリと手を洗つて昨日までの色んな職業とは打つて變つた軍服姿の殿めしい若々しい顔をして、入營後の第一日曜に、十人許り宛一團となつて、古參の一等卒や上等兵に引張られて、市内見物にぞろぞろと歩く新兵さんの風と云つたら、それは可愛らしいもので有る。極り悪げな、はにかみ勝な物珍らしさうな顔をして、そぐいの悪い大きな上衣と洋袴を着けて、千石船のやうな靴をぞろぞろと引ずつてある。それが二週間三週間と立つに従つて、擧手の禮も旨くなる軍服の着こなしもつく、いつとはなしに立派な兵隊さんになつて了ふ。昔は此座のが皆お士と云つて、えらう威張つたものだがなあとと思ふと、何とはなしに面白い感じがせぬでもない。

入營	見附の松に朝日影	遠東
朝風	に入營送る彩旗かな	柳雨
入營	の借肴短かき羽織かな	黒洲
入營	の男振り見よ日本晴	秋航
種	の更なるなして入營す	理音

宮中の御煤拂 (十二月三日—二十四日)

徳川時代に於ては、本丸の煤拂は十三日に行ふが例で有つたが、宮中に於ては十二月の三日から御煤拂が始まるが例で有る。

御所のまだ京都に在つた時代には、御煤拂と云つて立派な一つの儀式になつて居つたが、今は平素からの掃除が行届いて居るので、本當の形式と云つてもいゝ位。ところで此煤拂の爲、係員の外に臨時に御雇入になるものは、内匠寮で身元から性行に至るまで充分に取調べて選命した經師屋、墨屋、左官、大工、家根職、人夫杯六七十人で、當日は皆沐浴せしめた上で、宮内省にて消毒した印神糺を着せ、夫々係員が附添の上で各所に手配りして掃除に取掛るので有る。

けれども宮中には墨敷の御間は至つて少く、御座所と御内儀と女官部屋其他二三ヶ所に在るのみにて、他は悉く絨緞敷になつて居るので、墨替をさせられることは甚だ多からず、それも裏返しのようにものは新調せぬことに定めさせられて居る。そして各間の御裝飾品御用品などは、ちやんと前日に整理がして有るので、當日は墨や敷物を日光に曝らし修繕を加へられる丈で有る。尤も兩陛下の御座所丈は女官達が御手廻り物を片附けた後に、主殿寮の役員が御掃除し奉るので有つて、其際兩陛下には御表殿に移らせられ、御表殿掃除の際には御内儀に渡らせられることになつて居れど、それも大抵御多忙の故を以て土曜又は日曜に限り行はせられることになつて居る。

それから女官部屋の掃除の際には、權命婦以下それらの御部屋附の女官達が、何れも元祿式の小袖裳を翻へして袴かけ甲斐しく手廻り物の片付けをすることになつて居るさうな。試に凡そ年々行はせられる御掃除の日取を記して見ると

- ▲三日 新宿御苑(御殿、元鳴出御休所、動物園内御茶屋)△代々木御料地(御殿、御茶屋)▲四日 赤坂離宮(各御茶屋)▲七日 豊島岡集會所▲八日 吹上御苑(各御茶屋)△賢所前集會所▲九日 高輪御殿▲十一日 宮殿(東御車寄、南北溜及附近廊下東溜化粧一及二間、東一及二間、正殿、左廂)▲十二日 女官部屋▲十三日 宮殿(西御車寄、右廂、西一及二間、葡萄一及二間、西溜、千種の間、牡丹の間、竹の間、豐明殿)▲十四日 芝離宮△濱離宮▲二十一日 霞關離宮西洋館▲二十四日 同日本館

納の水天宮 (十二月五日)

正月の初水天宮や五月九月の賑には比すべくもないが、それでも日頃とは非常に變つた人の出で、天氣でもあれば小六月の暖かさに浮かれて、爺さん婆さんの連中がもう開門の四時頃になるとなかくの雑沓。お供物店のカチカチと云ふ切火の音、ガツサ〜と御圍箱を打振る響、カラン〜と云ふ寂びた鈴の音、これ等が殆んど絶え間なしに響く。さうして此日一日で十何萬と云ふお札が飛

んで逃げると云ふ話。

お事と臘八會 (十二月八日)

十二月の八日は、昔來正月事始めとか、略してお事とも云ひ、邪氣を拂はん爲、家々にて笹、目籠などを竿の先につけて、軒口に出すこと盛に行はれたが、今では此風も大方すたれて、日本橋や深川あたりの屋根や臺所口にたまに見られることがあるばかりだと云ふ。

此日を正月事始めと云ふのは、無論これからぼつくと正月の仕度が始まるの意で有らうが、或は此日を事始めにあらず事納で有る。十三日の方がお事始めの日で有ると云ふ説もある。従つて史邦の句に『身代も籠て知れけり事納』など云ふのが有る。昔からの論争で何れが真か明かならざれど、此頃より事納と同時に事始の用意かぼつくと始まるべきことは、用意のいゝ家に於ては今も昔も變りはわるまら。

尙此師走の八日は釋尊成道の日だと云ふ説によつて、大抵の佛等に於ては所謂臘八の法會と云ふものが行はれ、臘八粥として粥をつくり、又はお事汁と云つて小豆汁をつくつて食ふ習慣が有る。

臘八や浮世の粥のたき加減 句 佛

法水の沸く臘八のお粥かな 入 重 櫻
粥鍋に耳なき師走八日かな 拙 堂

大宮の年の市 (十二月十、十一日)

師走の十、十一の二日間埼玉縣は大宮町氷川神社境内に年の市が立つ。古來由緒深き市にて、關東最初の年の市で有るので、近郷の人の夥しく集るは勿論、東京からも出かけるものが少くない。年越の爲の雜貨は勿論のこと、木彫と土製の大黒天を賣ぐ店が多く出るので名高い。

氷川神社の祭事はなかくに嚴かなものにて、十日待と云つて既に十一月の三十日から九日に至るまで、神官は悉く垢離を取り精進潔齋して毎夜社前に簀を焚き、さて當日になれば百味御膳と云つて、河海のものとして焼鮓、干鯛、鹽鯉、干鳥賊、鮑、干章魚、乾鮓、鯉の入品、山野のものとして干柿、栗、長薯、生薑、とろろ薯、胡桃、青菜、ふと(餅)の入品を調理し、覆面して之を神に供へ、古式の祭典が行はるゝのださうな。

目黒不動の煤拂 (十二月十二、三日)

煤拂又は御身拭式とも云ひ、十二日の午後四時から行ふことになつて居る。紫衣に金襴の袈裟美しい和尚さんが先づ観音經の第二十一節を誦し始める。白衣姿の十二人の末寺の坊さんが忽ち之に和する。和尚さんはやがて立ち上つて、白布の覆面をかぶつて白の禪を十字にあや取り、御厨子の前に供へたお花や供物をさげ終つて、さて恭しくお開帳をして不動様の尊體にはたきをかける、坊さんが捧ぐる香湯に濕めした麻の布巾で、丁重に御體のまはりを拭ふ。之がすんで護摩を焚く。式と云ふのは唯それ丈で、あとは開帳の儘で十三日の午後十二時迄參拜を許すので有る。ところが此御身洗の水は濃風や火傷にはもつて來いの御利益が有るとあつて、お水をくくと云つて頂いて歸るものも少くない。此儀式と云ふのは随分古くから行はれたもので、徳川時代には執頭職とか云ふ六ヶ敷い名の、此不動尊の鍵を握つたえらいお役人様が、上野の東照宮とかの煤拂をすまして、其序に目黒不動尊の煤拂をやつたもので、維新後になつて久しく廢れて居たのを、昨年から再興したものだとやら。開帳の二日間には開山慈覺大師秘傳の開運守と云ふものを授ける。

淺草觀音の煤拂 (十二月十三日)

僅かに一寸八分の御尊體を以て、十八間四面と云ふ大伽藍の中に鎮座まします淺草の觀音様では、

例年の御嘉例とあつて、師走の十三日午前七時から煤拂の行事が有る。大坊主小坊主から味噌摺坊主に至るまで、揃ひもそろつて鼠の法衣に禪掛け向鉢巻と云ふ扮装で、それに刺子絆纏に頭巾を被つた何十名と云ふ男が加勢して、手ん手に小籠の束を携へて六百何十坪と云ふ本堂の中を大立廻りをやる。さうして此大立廻りがすむと、掻き集めた埃や小籠を大護摩の中に打ち込んで、大釜に湯を沸かして、お厨子から始めて隅から隅までの雑巾掛けが有る、それがすむと觀音様の御開帳があつて、二時から観音經の讀經が始まるが例で有るが、其又埃が何かの利益にでもなるものか、此日の參詣者は亦素晴らしいもので有る。

- 煤とつて寺もめてたき佛かな 尙 白
- 煤掃いて寝た夜は女房珍らしや 其 角
- 煤掃いつから見えぬ物の蓋 召 波
- 庭の煤風が拂つて臭れにけり 一 茶
- 梯子して仁玉の煤を拂ひけり 水 巴
- 煤掃や庭に居並ぶ羅漢達 鳴 雲
- 古厨子の煤に帳のはつれかな 六 花
- 一山の百の小僧や煤拂 巨 口

貧乏の神たゞき出せ糞掃
糞掃も鍋の尻わく夕かな

鬼史
月村

泉岳寺の義士討入記念祭 (十二月十四日)

二月のは切腹記念の正忌日祭。四月から五月へかけてのは本當の大祭、と云つては何のことかわからぬが、つまり大石の守本尊摩利支天のお祭。そして十二月のは義士討入の記念日で有る。泉岳寺には例年祭典を行ひ、お隣りの高輪中學では講堂に於て義士祭が行はれる。式場の正面には義士の位牌を安置し、供物を陳ね、校長は明治五年義士に賜はつた勅語を奉讀し、告文を讀み焼香をする、式後には講演が有る狂言手品が有る。夜は同校生や附近小學校生の提灯行列が有る。講談、琵琶歌の餘興、甘酒の饗應など云ふやうなことが年々行はれて居る。

年の市 (十二月十四日—大晦日)

正月の目出度い飾物の數々は云ふに及ばず、神祭る諸道具、臺所道具、羽子板破魔弓などと、有りとあらゆるお正月用の品物を處狭きまでに押しならべて、さむ縁喜のいのを負かつた〜と叫



び立て、客を引くなる年の市も、十四、五兩日の深川八幡の品調の年の市を始めとして、十七、八兩日の浅草観音のは年の市中の親玉、之については二十日二十一日の神田明神のそれ、二十三四日の芝愛宕、二十五六日の平河天神、二十八九日の薬研堀の不動は東京に於ける年の市中の重なるもの。夫から後には末に押迫つて、銀座日本橋の大通りを始めとして、今川橋邊、上野廣小路、浅草雷門前、兩國廣小路、人形町通、四谷傳馬町、牛込神樂坂上、麻布飯倉四辻、赤坂表町など諸方に年の市立ち、所謂貧乏市の稱ある今日一日の大晦日まで引張るもあれど、重なる年の市は十四日より二十八日迄なれば、大抵の商人は此間を最後の運だめしとして、色んな工夫をして資本をこしらへて、盛んに飾り立て、火の氣玉になつて客を呼ぶので、其晩の騒々しさ賑はしさつたらぬ。中にも一番儲るのは矢張り人氣物の羽子板店と桶の店であると云ふもの、一寸立派な羽子板店や桶店を出さうとするにはどうしても六七百圓の資本がかかるが普通だとやら。

▲深川八幡 上にあげた年の市の中で十四十五兩日の深川八幡のは、東京市内に於ける最初の市で有つて、此市によつて色んな商品の値段が定まると云ふ處から、品調べの市とも云ひ、昔は此市に春着を着て出かけて、羽子板の一番のを買ふを見得にして、頗る雑沓したもので有ると云ふが、近年は此市のお飾物の如きは非常に少なくなつて、江戸が亡びて深川が亡びて、殆んど田舎の市を見るやう

だと云はれて居る。

▲浅草観音 年の市で最も賑ふのは矢張此市で、八百八町から女も男もどや〜と詰めかける。雷門前から本堂へかけては、羽子板店がビッシリ並んで、仁王門を入つて左側には宮師、世帯道具店、本堂裏の方は注連飾と云ふやうに、千二百軒と云ふ露店がズラリと店を並べて賑ふので有るが、年十七、十八日兩日の内大抵一日は降ることが多いと云はれて居る。

▲神田明神 二十日二十一日の此市は、丁度年の市の真中位にあたる處から、商賣人の方でも大體に見切をつけると云ふ風なので、商は存外に繁昌する。二百何十軒位はいつも賣店が出るので有るが、一寸出店場所の場代と云ふのを聞いて見ると、一等一軒一圓八十錢、二等一圓二十錢、三等八十錢と云ふのが此二三年の相場とやう。

▲芝の愛宕 年の市中で場所の廣いのと云へば二十三四日の此市で、北は櫻川町から南は芝公園に至るまで凡そ六丁の間、兩側一面は勿論のこと、横町々々の兩側にまで露店がビッシリと並んで、年々の出店数は市中で最多の千八百軒位はある。そして愛宕神社ではいつも商賣氣を出して、百何段と云ふ急坂を上らんですむやうに坂下に臨時の拜殿を設けて、此處でお賽銭を受取る仕組になるが例で有る。



▲平河天神と薬研堀 二十五、六兩日に於ける平河天神の市は、愛宕のそれに劣らざるものにて、之と同時に本郷の湯島天神にても年の市が立つ。此所は狭いがまたなかくの賑で有る。そして二十八九日の薬研堀の年の市にて、所謂大市の年の市は終り、之より例の小さい辻市が諸方に開かるゝので有る。

序に四十三年に於ける羽子板と七五三飾の相場を見ると、市内の羽子板商四十五軒が例年の通り申合せて一定した小賣値段は、大體前年と變りなく、その中に賣行の最もよかつたは羽左衛門物の直侍、頼政、伴作、實盛等、梅幸物の三千歳、瀧夜叉、白酒賣等、芝翫物の十郎、淀君、義貞、吉野太夫等、菊五郎物の松前屋、權太、忠信等、吉右衛門物の一心太助、道節、光秀等、左團治物の鑄掛松、鳴神、高麗藏物の和藤内、矢の根、長兵衛等、雁次郎物の忠兵衛、仁左衛門物の八郎兵衛、段四郎物の鎌掛の如きものにて、尺二並四十錢より五十錢、尺四上八十錢同極上一圓、尺五上一圓六十錢より上々二圓、尺八上三圓七十錢より極上四圓三十錢位の相場で有つた。最も羽子板の賣行は、其年舞臺に上つて人氣のあつた芝居が原になるのであるから、毎年品物が變りゆくことは云ふまでもない。

それから七五三飾の相場は、四十三年は生産地たる千住附近の新葉が、夏の水害の爲に皆無な所から、前年に比して四割の高値を示し、大根七五三十本六尺七十錢、大王一個五十錢、上輪百個一圓廿

銭、並輪一束四圓、船七俵十個六十錢、前垂三尺物十枚七錢同長物一間三錢、牛蒡七五三本六尺一圓、讓葉一俵六十錢、橙石油箱一杯八十個入七十錢、海老大廿五錢、小十錢位で有つた。
 年の市線香買に出ばやな
 喧嘩する隙はありけり年の市
 人中を出ぬけて空し年の市
 面影もかはらけく年の市
 皮羽織店に出るなり年の市
 年の市梅さし上げて通りけり
 迷足に値をさす人や年の市
 浅草の鐘は二更よ年の市
 年の市腹切る播木いさ買はん

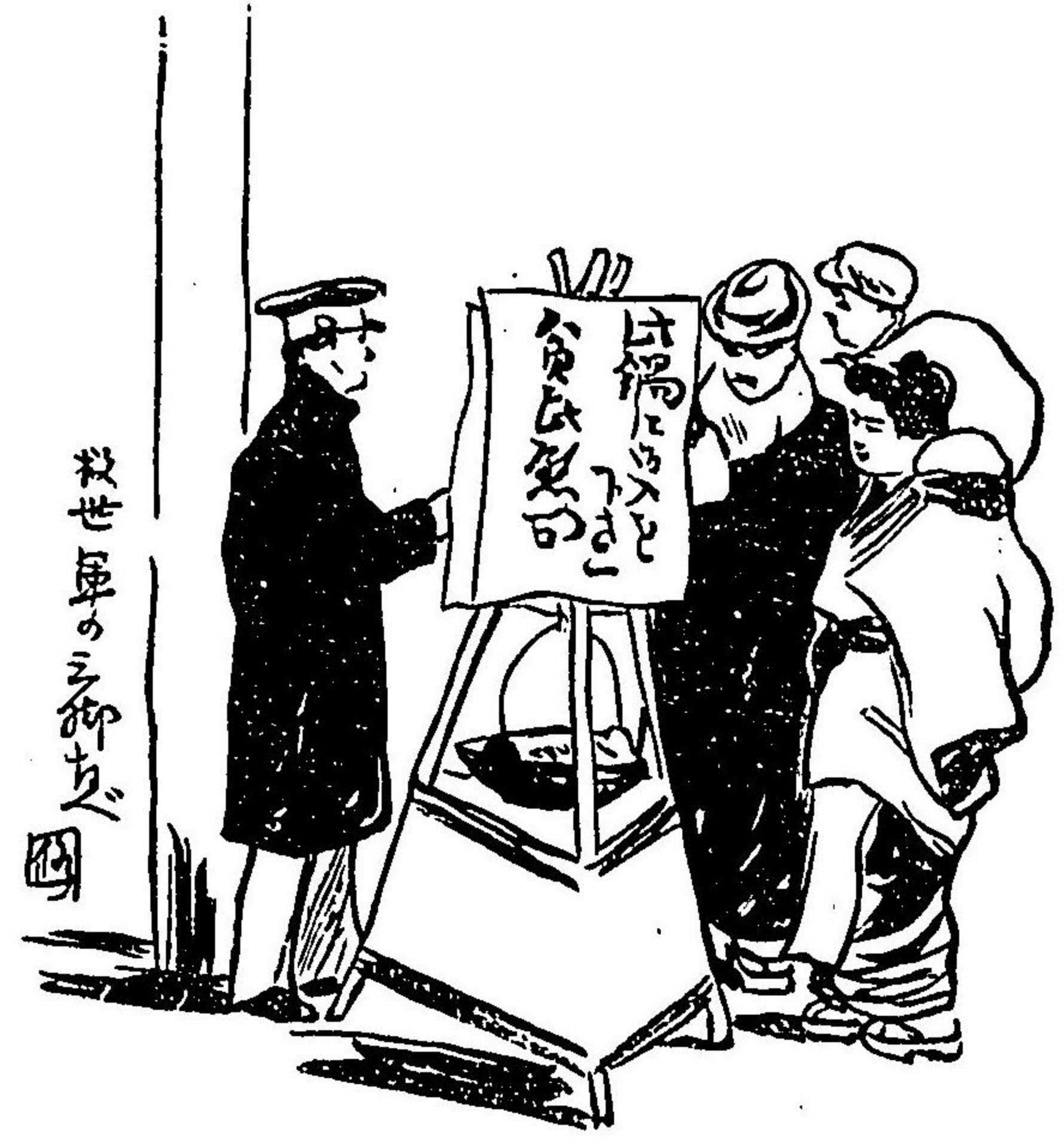
芭 立 園 蕪 一 雨 師 望 蝶
 燕 志 和 村 茶 什 竹 東 衣

三六〇

救世軍の三脚鍋 (十二月十五—三十一日)

ブース大將を總督に仰いで有る例の救世軍では、毎年十二月の十五日から、銀座本營前、新橋博品館前、數寄屋橋際、日比谷公園正門前、日本橋際、須田町、赤坂見附、水道橋、鐘橋、三越呉服店前、

九段、本郷三丁目十二ヶ所に、紅がら色の三脚鍋を吊して、慈善家の寄附を請ひ、市内の細民にお正月の雑煮餅を配ることにして居る。鍋の上には「通り掛けに出た慈善」と書いて有る。見て居ると滅多に投げ込んで行くものはないやうで有るが、それでも去年は東京大阪其他を合して、各戸四名の割にて貧民一萬八百餘人に對し、果物の籠に紅白一重ねの餅と繪草紙などを入れて贈つたと、救世軍の兵隊さんが語つて居つた。此處所に氣のつくのは流石救世軍で有る。



年賀郵便特別扱 (十二月十五日—三十一日)

年々新年に於ける郵便物の輻輳を避けて、普通郵便の敏活を計らんが爲とあつて、十二月十五日か

ら二十九日、いや大抵は三十一日まで延ばして、『年賀郵便物特別取扱』と云ふものが開始され、何處の郵便局前にも此九字の立札が眼につく。決して東京に限つて行はれるのではないが、東京には最も大切な面白い取扱で有る。十通でも百通でも、葉書でも新聞でも雑誌でも、堅く縛つて一纏めにして、『年賀郵便』と朱書して郵便局へ届けるか、ポストの中へ打込んで置けばいい。すると郵便局では年の内にそれを先方の局へ届けて置いて、先方の局では元日の第一便で之を配達する定めなので有る。取扱ふものにも差出すものにも受取るものにも此般便利な方法はないが、時折郵便局の倉相か、氣がきかぬ爲か、差出した人の手落の爲か、二十四五日頃から最う年賀状が舞込んで來ることが有る。遠方に居るものならばまだしも有るが、同じ東京市中で居て、年賀状を受取つてから、さてまだ春の來ぬ先に互に顔を合せて、『君の處へは最うお正月が來たのかね』は少し皮肉過るやうなり。季節の關係で昔から、『年の内に春は來にけり』など云ふことはあれど、まだ門松も立てぬ前から、『年の内に年賀狀來にけり』は、ちと變な心地がする。よしやそれが差出人の手落にしても、せめてお正月などにはあまり重箱主義のお役所風も吹いて貰ひたくない。

賢所の御神樂(十二月中旬)

宮中ばかりに於ける行事の一つに、賢所の御神樂と云ふものがある。除りに知られぬものであるが、應仁の亂後の如く、他の色々の行事の中絶して居つた時代に於ても、決して中止せらるゝことなく、古より今日まで引續いて行はせられたと云ふ點に於て變つたもので有る。

勿論例の天照皇太神が天岩戸に隠れさせ給ふた時に、行はれた神樂に因縁したもので、一條天皇の御時には既に行はれて居つたことが物に見えて居るから、其以前に於ても多分久しく行はれて居つたことで有らう。其始めは二年毎に行はれて居つたが間もなく毎年十二月に日を選びて、内侍所即ち今の賢所に於て行はせらるゝこととなり、近頃は賢所前庭の神樂舎に於て行はれて居る。尤も時わりて臨時に三ヶ夜の御神樂乃至最も重々しいものとして、七ヶ夜の御神樂を催させらるゝことも有ると云ふ。

毎年十二月に於て行はるゝ今の御神樂は、當日午後三時から御殿の裝飾あり、四時には式部職官員着床し、賢所皇靈殿神座を開扉、奏樂の中に神饌を供へ、五時前に親王以下各大臣樞密院議長及各應勅任官一名宛着床、五時に至つて陛下出御、御玉串を奉り、御拜御告文を奏せられ、畢つて入御。ついで皇后陛下皇太子殿下、同妃殿下と順次に御玉串を奉つて御拜あらせられ、更に之について親王以下宮内省掛官までの拜禮あつて、やがて御神樂が始まる。御神樂は雅樂師の奏するもので、

之と同時に神命を人間に傳ふるものと喩へられて居る所謂人長が、掌典から賢木の枝を受取り、鏡に持ち添えて徐ろに舞ふので有る。此賢木は後には陛下に奉るものださうな。やがて奏樂の裡に神饌を撤し扉を閉ぢて神さびた御神樂の式が終らるゝので有る。

昔は御神樂は宮中に於ける最も重き御儀式の一として、天皇親ら御神樂の和琴を弾かせられた例もあると云ふことと有る。

御神樂や火を焚く衛士にあやからむ
庭火焚く神代の舞の神々し

去 來
紅 綠

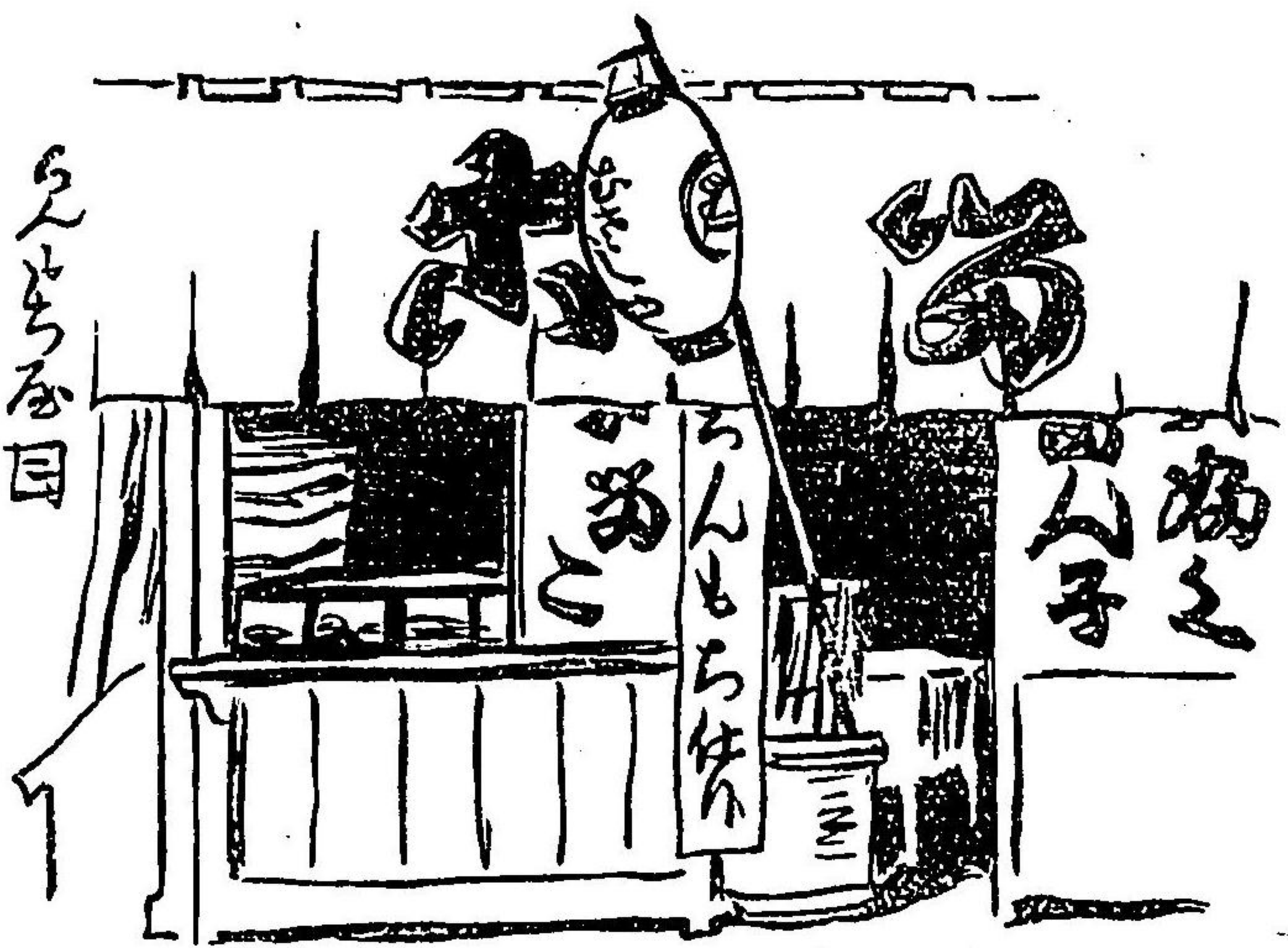
納めの大師 (十二月二十一日)

一年中最後のお開帳とあつて、川崎大師は西新井の大師と共になかくに賑ふ。勿論前晩からのお籠も大分あるが例にて、當日平間寺の住職は午前五時から衆僧を従へて本堂厨子前にて讀經開扉式を行ひ、午後四時までは絶え間なく護摩を修し、五時頃閉扉式を行ふことになつて居る。參詣人も随分澤山あるが習なれども、それでも歳暮に近づいて何となく人の氣のせはしいのと、時候が大分寒くなつた頃なので、時とすると書入にして居る料理店などが飛んだ眼に遇ふことも有る。

餅搗と餅店

十二月の月に入つて十日頃にもなると、もう餅屋餅菓子屋米屋などの店頭には『例年の通りちん餅仕候』と云ふ變な看板が立つ。そして二十日過にもなれば、ぼつり〜と杵の音が耳につき出す。勇ましい掛聲と共に、何となしに心地のいゝもので有る。普通は此等の家に頼んで幾ら〜と餅をつかせ所謂ちん餅が一番に多いやうなれど、釜やら杵やら擔ぎ歩いて搗いて歩く所謂引ずり餅と云ふのも偶にはないでもない。中にも面白いのは、年々二十七八日頃に行はるゝ市ヶ谷見附内の女子商業学校の餅搗で、校長嘉悦女史を始めとして、職員寄宿生の大勢が寄つてたかつて何れも甲斐〜しい禱がけに後ろ鉢巻と云つたやうな打扮で、男手一人を借らぬ賑はしい餅

東京中行事



搗。さぞや楽しい騒々しい夜まじり一日で有らうと思ふと同時に、成程今後の大商館のお女将さん
 にでもならうと云ふものは流石にちがつたものと、承つた丈でも偏に恐縮し奉るので有る。
 とこで幾ら少ないにしても、ちん餅でも引ずり餅でも先づ搗かせる方はい、が、本當の貧民など
 になると、それもかなはぬ。けれども斯うした連中に對しては又相當の方法が有るもので、流石に東
 京だと思ふ所が有る。試に押つまつた三十日か大晦日の晩わたりには街頭にのぞいて見ると、平生から
 縁日の市の立つやうな處は、何處とこでも年の市が立つて、其處には色んな飾りもの店が皆揃つて
 出て居る上に、神棚や佛壇に上げるべきお鏡餅の店迄がちやんと出て居る。そして直径一寸から二寸
 三寸五寸六寸と望み次第の大きさのがあれば、その他にお雑煮用ののし餅まで、幾らでも望み次第に
 切つて呉れると云ふ便利な世の中、これでは本當に正月は何時來たつて一向に差支へのあつたもの
 ではなうと思ふ。

餅搗や下月三代の譲り白 餅 六
 雞がなくあづま男や餅の音 薑 太
 餅つきや棚の大黒にこくと 一 茶
 あてにした餅が二所外れけり 同

餅搗のすてに來て居る隣かな 鳴 雪
 餅搗や女ばかりの姦しき 紫 蘭

冬至と柚子湯

十二月の二十二日前後に於て、太陽は赤道より以南最も遠き所に進んで、晝最も短かく夜最も長い
 日がある。此日が即ち冬至と云ふので、今後は再び晝の中が長くなるから、此日のことを一陽來復と
 か一陽嘉節など云つて、昔から詩人などは相集つて詩などを賦し、支那では古來此日を祝する習慣
 が有り、支那公使館員其他在留の支那人の多くは一日の業を休んでお祝するが普通で有ると云ふ。
 東京では此日何れの饒湯にも『今明兩日ゆず湯』と書いたビラ紙が張り出される習慣が有る。早
 朝の起きぬけに楊子を喰はへた儘で、柚子の香のブン〜と匂ふて、刻んだ皮がホカリ〜と浮いて
 居る中に、フワリと體を浮かした時の心持は實に何とも云へぬもので有る。それから冬至に南瓜を食
 ふと夏の患をせぬと云つて、南瓜を食ふことが廣く行はれて居るやうで有る。従つて此日は彼方此方
 に南瓜賣の爺さんが眼につく。

貧乏な儲者の訪ひ來る冬至哉 蕪 村

露の彼る影見し冬至かな
 月高く南京町の冬至哉
 秘め置きし南瓜煮て食ふ冬至哉
 抽の香の匂ふ冬至の朝湯哉
 抽の種の一つ沈みぬわがリ湯に

几 蓋
 紫 殘
 浦 舟
 一 坪
 瓊 音

帝國議會開院式 (十二月下旬)

毎年末豫算案の編成をまつて、天皇帝國議會を召集せられ、十二月二十日頃にはいつも開院式御舉行、陛下親臨して勅語を賜るが例で有る。

明治二十二年の紀元節を以て、憲法の大典を發布せられ、二十三年十一月二十九日始めて帝國議會を東京に召集して、車駕親臨、勅語を宣らせ給うたが恒例となつたものにて、午前十時兩院議員は各議院へ参集し、十時半親王、王、各大臣、樞密院議長副議長顧問官等貴族院へ参集、同時に陛下御出門、第一公式鹵簿にて貴族院へ行幸、衆議院議長兩院副議長、書記官長書記官等議院門内に整列奉迎し、御着あるや貴族院議長は御車寄に奉迎便殿に奉導する。其間兩院議員は各其議長の指揮に従つて

式場に整列し、やがて式部長出御を奏請し奉れば、陛下式部長の先導にて親王以下を從へ玉座に着御。各員此時最敬禮をすると、陛下には立御總理大臣の奉進する勅語書を受取りて讀ませ給ふ。各員の最敬禮畢つて、貴族院議長は御前に進み、勅語書を拜受し列に復する、陛下即ち再び式部長の先導にて親王以下を從へ入御せられる。還幸の際には復兩院議長、副議長書記官長、書記官等議院門内に整列奉送し、還幸あつて後諸員退散するので有るが、退散に先つて兩院は各自奉答文を議決し、各院議長即時参内して之を奉呈するが例で有る。

此日文武官駐在外交官等には院内傍聽席に於て拜觀を許さるゝことになつて居るが、實際の服装は文官有爵者有位者は大禮服、陸軍將校及警察官は正裝、海軍將校は正服、其他は通常禮服、勳章あるものは本綬を佩用すべきことになつて居り、尙閉院式の際には陛下の行幸なく、總理大臣が勅語を奉讀して、貴族院議長に授けることになつて居る。

蕪村忌 (十二月二十四日)

押しつまつた暮の二十四日だからと云ふばかりでもあるまいが、年々蕪村忌と云ふものが正直に行はれると云ふことはないうやうで有る。が偶運座など開いて、これが記念の句をつくるなど云ふこと

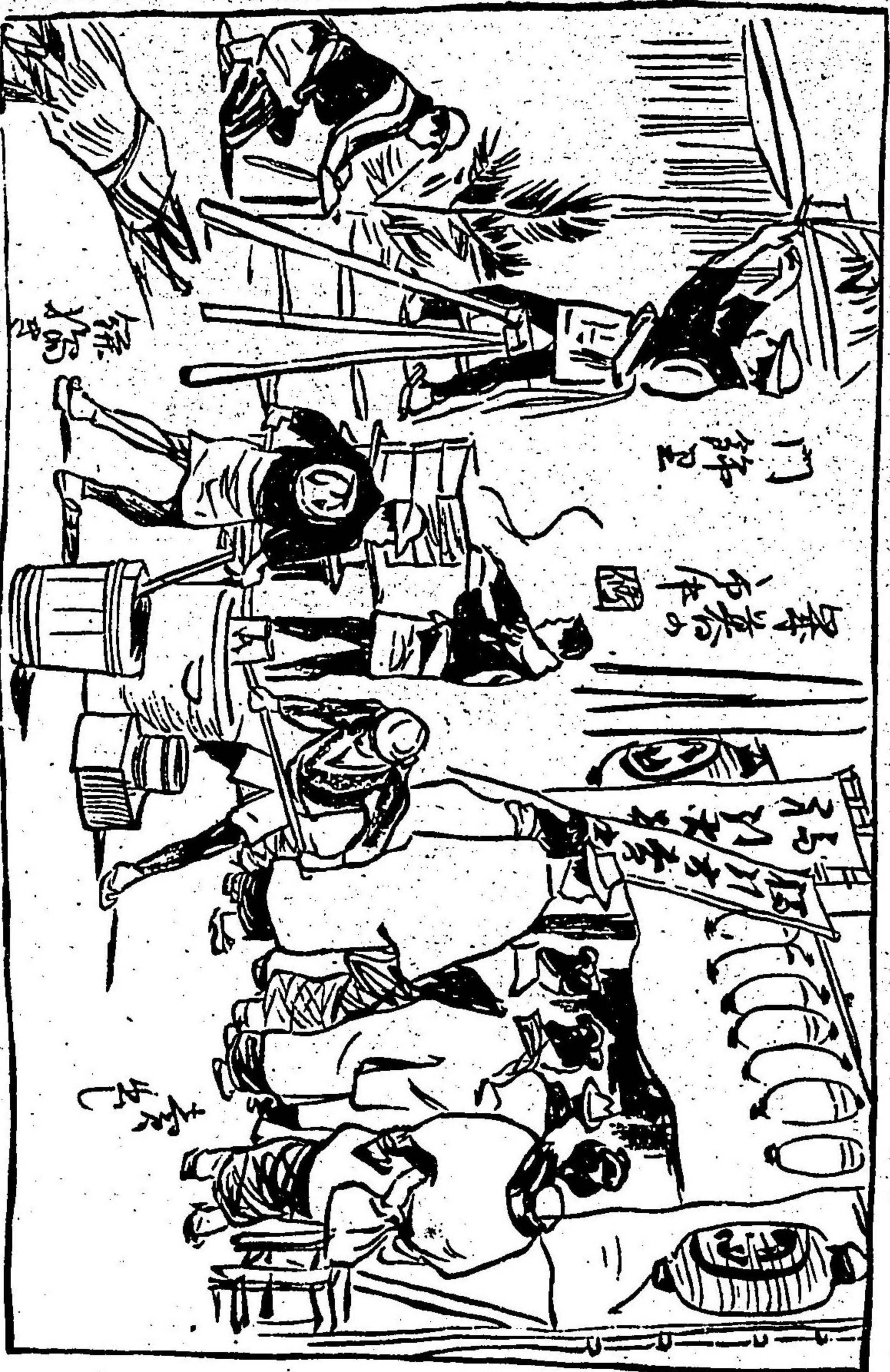
政治始の日まで、各官廳がお休みになるは都も鄙も變りないことであるが、二十九日から三十一日まで三日の間は、在京中の親王王殿下を始め、高等官、同待遇者、有位、有爵、有勳者、神佛各宗派管長、門跡寺院住職等は皆新年と同じく、歳末の御祝詞言上の爲に、宮中へ参賀することになつて居る。これは明治二年太政官達を以て、定めさせられた御儀式の一つである。

大祓と除夜祭 (十二月三十一日)

毎年十二月三十一日に宮中に於て行はせられる御儀式に節折、大祓、除夜祭の三つがある。前二つは六月の晦日にも行はせられることは既に記した通りであるが、十二月には大祓について更に除夜祭と云ふのが行はれる。

式は至つて簡單なものにて、先づ午後五時より賢所、皇靈殿、神殿の御裝飾の後、式部職員着床、神扉を開き、奏樂の裡に洗米、酒、海魚、川魚、海菜、野菜、葉、鹽水など八臺苑の神饌を供へ、掌典長が祝詞を奏する丈である。

大奥の御歳暮



一昨年の暮で有つたか、何やら新聞に載つて居つた記事によつて見ると、九重の奥深き邊りに於ても、御歳暮と云ふことは矢張殿に行はせられるやうで有るが、之に使はせらるゝ品は民間に於ける鯉節、鶏卵、酒などと云ふものとは異つて、主として反物、漆器、繪畫、玩具、烟草などを多く用ひさせられ、中にも反物と云へば白羽二重に限り、之に官等によつて差別はあるが、二百圓乃至三百圓の金圓を添へて下賜さるゝが通常である。猶此外に大奥にては古來臣僚に時服を賜ふ慣例が有り、今も益と暮とは必ず之を行はせられることになつて居り、近頃では大抵フロックコート地の賜はり、此外宮内官一同には皆夫々兩陛下の用ひさせ給ふた御服を始めとして、縮緬や羽二重の御座布團、御枕、御褥などの品を賜はる習はしあり、尤も聖上陛下の御退物は男子の宮内官に、皇后陛下の御退物は各女官方に賜はるが通常で有る。此等の外宮中顧問官中の最高齢者に對しては陛下よりは年々翌年の干支に因んだ繪畫を賜はる例しあり、皇后陛下には皇孫殿下を始め、内親王殿下韓太子などにも翌年の干支に因んだ色んな玩具を賜はるが通例で有るとやら。

歳暮の東京

十二月に入ると、今迄小春日和の暖か、つた天氣は、何となくどんよりとした寒さうな天氣に變つ

て、空つ風がふうふうと矢鱈に吹き出して、東京は又してもそろそろと塵の都にかへる。ふりみふらずみの空が一朝毎に寒くなつて来る。

十四日十五日の深川八幡の歳の市が立つてよりは、一日とお正月が迫つて来るやうな気がして、二十日にもなればもう気の早い家にては門松を立て飾る。縁日の植木店は福壽草松竹梅雪割草などの縁起物ばかりとなる。何れの商店でも歳暮の賣出しが行はれる、所によると一町二町が聯合して、旗幟提灯樂隊で囃し立て、所謂聯合福引大賣出しと云ふものをやる。雜誌屋や新刊書籍店の店頭にはぼつ／＼ともう新年號の雜誌類が飾られ始める。名刺印刷年賀はかき印刷の立看板が眼につき出す。藥種店の軒には『延壽屠蘇散』のびら紙が下る。路地や軒下ではもう突羽根の音が聞え出す。日が暮れると歌留多や雙六の景氣のいゝ笑ひ聲までし出す。菓子屋や砂糖屋や乾物屋の店先には、お歳暮と書いた進物の紙袋が矢鱈にならべられる。汁粉屋菓子屋米屋などには十日も前からもう『例年の通りちん餅仕り候』と云ふ妙な文句の立看板が立てられる。仕事師四五人が組合つて、竈、釜、蒸籠、臼、杵等の諸道具をかつぎ歩いて、人の家の軒先で餅をつく所謂引摺餅屋もぼつ／＼と見え出す。かうして日一日と往き交ふ人足までが忙かさはしさうになつて来るので有るが、二十五六日ともなると、例の鹽鮭や砂糖袋をさげたお歳暮配りが殊の外に眼立ち出し、方々の辻角などには、小さな菓小

屋をしつらへた、注連繩、門松などを商ふ所謂だら／＼市が賑ひ出す。忘年会と云ふものが方々で行はれる。さうする中に大晦日になると、人と云ふ人の面には、何とはなしに落ちつかぬやうな影が宿されて、東京の天地は何處もかしこも泥鰌を入れた大盃か、蠶を入れた大きな箱のやうになつて来る。活動か、活動ばかりでもない。喜か、喜のみでもない。希望と喜と活動との打交ぜられた落着くことの出来ぬ沸くやうな動搖と騒々しさの天地がこゝに現出されるので有る。

この動搖と騒々しさの夕に於ける蕎麥屋の繁昌することよ。朝の中から注文して置いて、暮るゝまでに三度も四度も催促しても夕食の間に合はず、暮れてからあつらへたものは、除夜の鐘をきいてもまだ蕎麥の顔を見ぬと云ふやうなことは決して珍らしからず、かうして年越蕎麥は今も猶盛に祝はれつゝ有るので有る。

さうしてお金の勘定やら、お正月迎の忙しいお仕度の中に、百八つの除夜の鐘はいつの間にか鳴つて了つて、正直に云ふと翌年の正月になつて床に入るのが通例で有ることは、別に他の場所と變つたことはない。けれども此夜に限つて市街の電車は、數は兎に角に終夜運轉をやるのが年々の例で有る。

都かな橋の下にも年忘
年忘酒泉の大守鼓うつ

子一
規茶

小傾城行きてなぶらむ年の暮
來年は來年はとて暮れにけり
脚の尾をさげて立ちけり年の暮
何のその首はぬくまい年の暮
鼻よのほいんどころか年の暮
鴉かあ雀ちうとて年暮れぬ
風吹いて今年も暮れぬ土佐日記

子存同一正露其
規亞茶秀川角

燈火も花の都や大三十日
先づよしと大晦日の廢酒哉
大江月や動くもの皆大晦日
大三十日女牛賣そこれけり
大晦日空の財布を拾ひけり

雪一戲一閑
村轉道茶更

行年や同じ事して水車
さまくは暮れ行年の一日哉
行年や智恵の袋の指り粕
行年や糟糠の妻子澤山
行年を載せてぞ走る電車哉

萬不碧士旨
關句桐朗原

迷信の東京

東京の迷信と云ふよりも迷信の東京と云つたがいゝ位で、方角につけ時刻につけ、食物につけ病氣、金錢、結婚と何から何まで、悉く吉凶禍福を云ひ縁喜を云ふ。あれでは逆も八方塞がり日々塞かりで、一年三百六十五日何をすることも出来ず、ほかんとして居らねばならぬやうに思はれる位。そしてあれ位のこと分つて居らぬ筈はないと思はれるやうな立派な人達までが、病氣が治りますやうにとか、方角が悪いからとか、金が儲かりますやうにとか云ふやうな、色んな無理な願懸をする。こんな點を思ふと文明の東京にはあらず、寧ろ暗黒の東京で、科學の力も何も殆んど有つたものではない。かうして色んな神佛は愈々繁昌し、所謂縁日は今も昔も變つたことはない。試みに今最も廣く世間に知られた神佛と迷信の關係のみについて少しく述べて見やう。

▲淺草觀音 何と云つても東京市中で迷信の中心と云ふべきは、矢張り一寸八分の本尊様を命の淺草觀音と其の附近で、試みに觀音堂へ上つて見ても、安産御腹帯、不淨避、災難避、劍難避、厄病避

火傷避、疱瘡避、怪我避、病難避、蟲避、開運札、道中お守、船中お守などのお札が、殆んど羽が生えた様に飛び、平常でも一日一萬以上、月の一日十五日と十八日とは、少くも五萬の參詣者が有り、一錢二錢宛のお札の賣上高が十五圓乃至三十圓に及ぶとやら。其他一日で千日詣つたに相當すると云ふ毎月一回のお茶湯日や、一日で四萬六千日の參詣に當ると云ふ七月十日日には、殊に愚婦愚夫連の參詣夥しいことは年中行事の項に於て記した通りで有る。

▲錢塚地藏とかむく地藏 共に淺草觀音堂の周圍にあり、錢塚地藏は宮戸座の手前に在つて、地藏様を磨りかいた粉を神棚に祭ると、金がふえると云ふ迷信あり、永樂通寶だとか一文錢の畫をかいた御獻燈なども有る。

かむく地藏と云ふのは錢塚地藏と馬木像のある馬頭明王との間に在る。叩くとかむくとか音がするからの名で、今はもう全身缺かれてすれてくへ凸凹になつて居る。磨り缺いた粉は腫物の妙藥だと信ぜられて居るから有る。

▲おびんづる様 上野清水觀音堂、芝愛宕下藥師堂、淺草觀音などにあり。さすられて眼も鼻も手も足も殆んど分らなくなつたのがそれで、信者の悪い處をお詣りして撫でさすると治るのだと云ふ。元は釋迦の御弟子で有つたが、餘りにお喋舌が過ぎて釋尊の怒に觸れ、家の内へ入ることを許されず、

己じことを得ないで軒下に跪座し、法道修行に加へて釋尊の怒を解かんが爲、病人に代つて自ら病み、衆生の病氣を癒したと云ふ傳説が基となつたものにて、淺草の觀音のは賽銭箱の右手に小さな屋根の下に五六枚の座蒲團の上に坐つて御座るのがそれで有る。

▲久米平内様 淺草の仲見世を過ぎて山門に入らうとする右手に、久米平内兵衛長守とかいた白旗三四本を建て、香華の絶えたことなき小さい祠が有る。祠の中には久米の平内の石像が有り、縁結の神だと云ふので、妙齡の男女の參詣の絶えたことがない。さても全國を武者修行までやつて、剛勇天下に隠れない久米の平内が、死んでからは縁結の神となると云ふのは不思議も不思議なれど、謂はれを調べて見ると誠に以て馬鹿くしい間違が源で有る。時はまだ幕府の頃、青山主膳と云ふ御徒先頭、平内が劍術取手の名人で有ると聞くや、直ちに平内を用人格に召抱へ、盜賊方を申しつけた處太刀打早業の達人のこととして、功名をあらはすこと數百度、後死囚の斬首役を仰せつかつて、斬首の數二千に及び、一生の間に首塚を二度まで建てた程なり。ところが平内死に臨んで、これまでの罪障消滅の爲に、自分の石像をつくりて、成るべく、多數の人の踏みつくるやうにして欲しいと遺言したのを、いつの頃よりかフミつけるを文附けると誤解し、昔は御殿女中などの使の者に十六文を與へて平内の石像に艶書を納めしめたもの多く、そして其頃おたふく辨天の堂守は、艶書を開いて、『此戀叶

ひ申候』とか『此戀叶ひ不申候』とか云ふ返書を認め、之を使のものに持たせて歸したものと云ふ。そして當時は願事が叶つた場合には、鳥居を建て、小さい願事でも有つたらば、御禮として繪馬を奉納したもので有るが、今は場所のない爲に鳥居の代りに幟を捧げることになつて居るのだとやら。

▲長谷寺の夜叉神 澁谷に在り、腫物一切に功驗あらたかなりとあつて、其縁日で有る彼岸の中日の參詣人は夥しいもの。

▲上行様 下谷泥溝店などの他市内到る處の日蓮宗の寺院に在り。祈願の時と平癒の時とに、上行菩薩の身の、自分の患つて居る場所と同じ處を、水をかけて洗へば何んな病でも立ろに平癒疑なしとやら。

▲芝日蔭町日比谷神社 祈るものは鯛を斷つと云ふので鯛稻荷とやら云ふ、齒痛には靈驗殊に著しいと云ふ。

▲善長寺のおさんの方 麻布飯倉に在る墓石にて、其昔此寺の住職が諸國修行の折柄、備後の福山にて齒を病み、備後の守勝成の室おさんの方の墓に祈願すれば平癒するといひ、願をかけて見ると果して其通りなので、歸山の後に之を勸請したものだといふ。

▲千住の清兵衛様 千住の天王様からまた四五丁進んで、右へ入つて二丁許り行つた處に在る。色

んな面白い所謂が有るが、齒痛の御利益は大したものやうで、お線香の煙は絶えたことがない。とて愈平癒した時には、鑑の繪馬をあげるのだと云ふ。

▲榎坂の榎 昔は赤阪葵坂の榎様と云ふのが、顯な御利益が有つたと云ふが、十數年前それが枯れてよりは、今此榎坂の榎様が流行ると云へど、決して昔の如き繁昌はないと。

▲日限地藏 小石川仲町西岸寺、同區小日向町智願寺、芝白金松秀寺、淺草芝崎町日輪寺など方々に在り。何れも祈願の折に、何日までに私の病氣を平癒させて下さいと日を限つてお願すれば、恐ろしい程の御利益あるとやら。多くは諸病一切と銘を打つたが中に、西岸寺の日限地藏様は足の御利益があり、患者は草履に祈願の日を書き付けて坊さんに加持祈禱して貰ひ、之を家に持歸つて軒先に打ちつけ置き、満願の日に新しい草履を上げればいゝと云ふので、萬一病氣がふり返した際には、何處にある何んな神様かは知らぬが、木瓜大明神と三度唱へると直ちに平癒するのだと云ふ。

▲建壽寺の日荷様 谷中三崎町に在り、足の病一切に靈驗あるとか。日荷と云ふのは日蓮宗の健脚でめつた坊さんのことにて、いつの世よりか足の神様にしたのだとか。此外に足の神様には淺草公園の一區に、鉢力製の草鞋が澤山上げてある章駄天様もあり、今は流行らなくなつたが、芝青松寺に在る槍持勤助の墓と云ふのは、其昔足一切の病に效驗あるとて非常に流行つたものだ云ふ。

▲菫蘭園 小石川初音町に在り、菫蘭を断つて願がけすると眼醫者もかなはぬほどに眼病が癒ると云ひ、正月と七月との十六日には、閻魔様の縁日丈あつて菫蘭を上げる事夥しいもので有る。

▲章魚薬師 これも章魚断をして祈れば眼病が治ると云ふ有難い神様、章魚と眼病とはどう考へても聊か變に聞えるが、傳ふる所によると、元々此薬師の本家は山城國澤と云ふ所に在つたを、眼病の御利益著しいとあつて参詣者の多い所から、後に京都は新京橋通りに遷した頃から、『澤』を『た』と訛つて、何時とはなしに章魚薬師と云ふに至つたのだとやら。

▲茶の樹稻荷 市ヶ谷八幡境内の坂の中段に在り、七日の間茶断をして、毎朝正一位茶の樹稻荷大明神と云つて祈念をこむれば眼病が治り、さて平癒の上は幟一本を獻納すればいゝと云ふ話。

▲不動と眼病 眼病に御利益のあるものには、その他下谷中根岸西念寺の眼洗地藏の外に、不動様には高田老松町の目白不動、目黒の目黒不動、本郷駒込片町南谷寺の目赤不動、青山南町四丁目教學院の目青不動、下谷三の輪永久寺の目黄不動、同じ下谷最勝寺の目黄不動などが有る。

▲縛られ地藏 本所中之郷八軒町の南藏院、小石川若荷谷の泉林寺などに在る。祈願をする時に地藏の體を何處でもかまはず荒縄で縛つて、願をかなへて下さつたら此繩を解さすと云つたらそれでいゝと云ふので、さて愈願の叶つた時には荒縄を解くと共に、繪馬や幟をあげるが例である。願懸す

る方から脅迫的に出て却て願が叶へられるとは、一寸變つた話なるが、地藏様の方でも纏目の恥は餘り永くはかきたくないものと見えて、それは一變な繁昌。

▲笠森稻荷 一には斎守稻荷とも云ひ、腫物だとか下の方の病に御利益がある。芝公園にもあれど、本家は矢張谷中の三崎町にて、最初土製のお團子をあげて、病氣を癒して下さつたら米の團子を差上げます、と云ふのだらうにて、これについては面白い俗話と傳説とがある。今は昔天明寛政の頃とやら、此稻荷さんの團子店に、お仙と云ふ美人が居つたのが評判となつて、瘡氣はなくとも自惚氣のある連中が日々群集したのが基で、例のカツボレの『向ふ横町のお稻荷さんへ、一錢あげて、ごつと拜んでお仙が茶屋に、腰をかけたら澁茶を出した、澁茶飲み〜横目で見たら、土の團子か米の團子か、さて〜美しや』の俚話も出来たのだと云ふ。

▲水天宮 淺草の觀音を除いては、金刀羅様と共に東京中で最も繁昌するもの、一つなる水天宮の御守は、水難避の外に、頭痛腹痛を始めとして、胸の惱む時などには四牌の黒い點をひしつて、水に入れて呑み、産氣がついた時真中の黒い處をひしつて水で呑めばお産が軽いと傳へられて居る外に、花柳社會や藝人連の縁喜を祝ふての參詣が多いは一寸分らぬ所である。

▲金刀比羅 印度では燈臺の神だとか鱈の頭だとか云ふ此神様は、船乗の守神と云ふ外に商人や花

柳社會に甚しく信仰されて居る。

▲待乳山聖天様 聖天様の信者になると、其人のつき合つて居る人々の財寶が悉く信者の一身に集ると信ぜられて居る。従つて信者の家に來た客に油物を御馳走して、客がそれを食ふと、信者は其人の福德凡て之を奪ふことが出来ることとせられて居る。試みに聖天様の御利益と云ふのを坊さんに聞くと聖天様は效顯著しい神様で、御本體は十一面觀音です。一日二日の面白半分の信心では神罰が當る。信心するからには十年二十年は愚か一生の間信仰を續けねばなりません。毎日參詣せねばならぬと云ふ事はなく、家の都合用事の都合で參詣の出來ぬ人は、自分の家で信心するなり、當社で代參するなりすればよいのです。代參料は一日分三十錢、一週分の代參料が三圓七十五錢、御浴油と申して聖天秘法の代參料は七圓五十錢です。よく初めの人は直に本尊を戴きたいと申されますが、當社では其人の信仰心を見抜く迄は御本體を差上げることが出來ず、御本尊を信者に戴かすには種々の六づかしい法を踏まねばなりません。それに聖天様と云ふ神様は却々偉い神様なのですから、佛壇や其他の佛様神様と一所に置いては神罰が當ります。若し外の神様と一所に置いたら、少くとも伊勢の太神宮様位でなければ罰があたります。若し貴方が御信心なさるとならよく考へて、途中で變らぬ様にして御信心を始めなさい。それは争はれぬもので、屹度金満家になれます。尙聖天様の供物は大根

と決まつて居るので、此社の器物には多く二股大根が書いて有ると云ふ。それから聖天様のことをば、大聖歡喜天王とか、大聖歡喜大自在天神と云ふ所から、此處には歡喜團子と云ふものが有り、之を食ふと一生の福徳が得られると云ふことになつて居る。

▲廿酒地藏 浅草永住町清徳寺内及同區芝崎町日輪寺内地藏、小石川區第六天町日輪寺内廿酒さばさまなど、皆願懸り毎日廿酒を獻すれば咳を治して下さると。

▲新宿正受院脱衣婆 杓子に目木大明神と記したるを願懸の時寺に納め、再び之を受けて自宅に持歸り、軒先に打つけ置けば百日咳を治す。

▲汐時地藏 深川西六間堀町要津寺内に在り、お寺から拍子木を戴き子供は之を玩具にし、大人は之を頭に吊つて、咳の出る度に、咳の數ほど拍子木をチヨン〜と打ち、咳が癒ゆれば更に同じ形の拍子木一本を添えて寺に返献する習である。

▲浅茅ヶ原の化地藏 浅草玉姬町出山寺に在り、橋場の化地藏とも云ひ、毎日缺かさず御賽錢をもつて一週間日參すれば、風邪や咳に御利益あれど、賽錢を忘れると御利益が消えるので、改めてやり直して願懸けをせねばならぬと云ふ現金地藏。

▲蕎麥食ひ地藏 浅草田島町誓願寺九品院に在り、蕎麥を上げて願懸すれば咳がなほり、本復の後

にも蕎麥を上げる掟になつて居る。

▲駿馬塚 浅草山谷町埃横町に在り。風邪に馬の爪を煎じて飲むと云ふ迷信と關係あるか否かは兎に角に、足の病に御利益があると云ふ外に、此塚には百日咳の御利益があり、お禮には馬の草鞋を上げればいゝとやら。

▲砂村の疝氣稻荷 本當は大智稻荷と云ふのださうで、疝氣寸白に御利益あり、浅草の蕎麥食ひ地藏と同じやうに、祈願の時と平癒の時にお蕎麥を上げる習である。

▲三光稻荷と妙見稻荷 三光様の方は犬猫の病を、妙見様の方は狐憑を落す力が有る。

▲堀の内の祖師 こゝから出す御符は素晴らしい難有いものにて、何んな病氣にでも非常な御利益あり、頂いた御符を病人の枕元に貼り置き、七日目毎に新しいのを二度貼れば、三週間目には大抵の病氣は吃度平癒し、例へ難病長病で有つても六週間目には本復疑ないと云ふ。

▲浅草小島町の觀音石像 丁度樂山堂病院の裏手に在つて、石像の右側に『深遠妙閣尼』とあり、左側には貞享五戊辰五月五日と刻されて居るから、今より二百二十餘年前の建立であるらしい。以前は浅草永住町の善立寺と云ふのに在つたのださうだが、眼病と齒痛に御利益があると云ふので毎日四五人乃至百人位の參詣者が有る。

▲六地藏と石燈籠 淺草觀世音の直ぐ左手、淡島様の前の池の畔に、諸人の信仰の厚い石燈籠があり、その火袋の處に六體の地藏菩薩が刻まれて有る。高さは六尺ばかり、鐵網で掩はれて居り、元來久安二年の六月、源義家の家臣鎌田政家が淺草寺へ獻じたもので、久しく花川戸の南の土中に半埋れになつて居たのを、明治二十五年東京市で掘出したものだとか。何時の頃からか難病を治するの力ありと傳へられ、中にも花柳社會の參詣者が最も多いと云ふ話。

▲本郷妻戀稻荷 妻戀坂の上に在り、嫁入の行列が此社の前を通つて行くと、破鏡の歎必ず免れぬとあつて、行列は必ず此處を通らぬことになつて居る。謂はれ因縁と云ふのを聞いて見ると、其昔日本武尊の東夷征伐の折、妃弟橘姫が難に殉じて海底の藻屑と消えられたのを『あつまはる』と云つて歎かれたのが此妻戀坂で有るからだと言ふ。

迷信のいろいろ

蟻塔生

金毘羅信者の中には、蟹と鰯を斷ち物とする者がある。不動尊には鳥と卵を斷ち、道了様には、鰻と烏を斷ち、笠森様には團子を斷ち疝氣稻荷には蕎麥を斷ち、玄徳稻荷には里芋を斷ち、藥師には茶を斷ち、聖天には生大根を斷つなどの事がある。この聖天様は聖て、聖て首の御本尊で、慈眼の神様であるから、お供物を食べるには、油いかにして食べぬと、鰯を持つて行かれるなど、信心者の仲間

て首び觸らして居る、凡て理窟に協つて居る様でもあり、仙臺の無い様な所もあるのが之が神佛の有難い所かも知れぬ。

初甲子の大黒天には福財布が出るので非常の参詣がある。傳通院の大黒天が名高い。暮れの巳の日には不忍池の辨天堂で、已成金の小判を賣下るので、未明から混雑する。辨天堂へ男と女が二人連で参詣すると縁が切れると言つて、夫婦だとか相思の間ではこれを避けて居る。此縁を切るには、板橋に縁切板といふのがあつて、紐に附き纏はれて困つた女は板の削屑を買つて來たりする。所て一方では、淺草の仁王門の前に桑平内様の祠があつて、専ら縁結を司つて居る。仲々便利に出來て居るものだ。觀音堂の板の間の砂を持つて來て、自分の家の前へ撒くと、人足を呼ぶと言ふ話である。風神に鹽を備へると、風邪を引かない。雷神に草鞋を備ふるのは、足の病に罹らぬお呪である。藥師にはめと誓いた給馬を備へる。淡島様には藝事凡て手先の器用を祈るために、鶴を紙で折つて上げる、着物の裾を掛額にして奉納する。錢塚地蔵には鹽を土器に盛つて供へる。稻荷様には午の日に油揚を供へる。土燒の狐を供へて信心して御利益があると、一對にして又供へる。何處の稻荷にも無数の土燒や陶器の狐が上つて居る。耳の病を癒して呉れる庚申様がある。白馬に遺る大豆を載いて來て食べると、齒齲の癖が直る。四萬六千日に千成酸漿と唐黍を賣つて居る。この唐黍が雷除のお呪となる。九月九日に觀音様へ菊を持って行つて、供へてある菊を貰つて歸り、これを枕の下へ入れると、腦を病まない。仁王様へ紙幣を投げて思つた所へ當れば、願事が協ふ。天神様の石の牛へ鼠を吐かして、錢を抛つて、それが巧く乗れば、心願が成就する。荒神様に供へてある松の葉を一本抜いて來て、紙に包んで延喜機へ上げて置く女將も居る。酉の市へ行つて熊手の飯を知り様に持つて來る。羅敷も居る。節分に撒く豆を拾つて財布へ入て置くと、小遣に不自由しないと云ふ藝妓も居る。鼠小僧の墓の石を缺いて來て、無惡に當るを祈る旨問も居る。上野に名高い淨名院の石地蔵の持上る、持上らぬに依つて運命を占なふ茶屋女も居る。凡て神佛に對する信心と、信心より起るさまざまの行動には、喧嘩可き材料が花柳界の到る處に於て目撃せられるのである。

淺草と上野

夜の淺草

七月十九日の夜で有る。雷門で電車を下りて観音様の方へ向ふ。

今年はまだ大した暑さでもないが、流石に八九分通りは浴衣の人である。後の一二分の黒い衣の人は顔も黒い。白い顔の人に黒い衣の人は滅多にない。

観音堂へ上つて見ると厚い頑丈な戸がもう四方に締め切つて有つて、中からは火の光も洩れて居ない。それでも賽銭を箱に投げ入れては大慈大悲の南無観世音菩薩何とかかんと云ふやうなことを唱へる参詣人が引も切らぬ。立つて見て居ると、拜んでる人は何とも思つて居ないやうだが、始めて斯うと知つた自分には、折角の願懸も戸の厚が三四寸もあるので利目が鈍さうな心持がした。何の故あつて夜は戸を閉めるのか、何時の世からの習はしかは知らぬが、宵も宵、八時にもならぬうちから、参詣人のどつさりある観音堂の戸を閉めるなんぞは、餘りに現金で有る、胴慾で有る、無風流で有る、没趣味で有る、自分は薄暗い奥まつた堂内にボウーとした暗い燈明のついた観音様の堂内が見たいと思つて居たのに、此有様を見て何とも言葉が出なかつたので有る。コレはコレは！と云つて

西側の方の階段を下りて右に曲つた。

ふと右の方を見ると、天幕のやうなもの、下に薄燈光がついて、大勢の人が集つて居る。喧嘩か、賣下か、まさかには剣舞でもあるまい、居合抜でもあるまい。と思つて其方へ進んで行くと、天幕傳道と書いた高張提灯が二つ吊して有る。天幕の中では傳道と云ふから耶蘇法主かと思ひの外に、金襴の袈裟をかけた、何宗か知らぬが本當の坊さんが、お説教をして御座らしつやる。自分の小さい時に、アルヘー糖の欲しさにお祖母さんに連れられて田舎の寺へ参りに行つた時分に、聞いたことの有る説教の口調と比べると、何だか非常に開けたやうな、演説口調のやうなお説教で有るが、それでも耶蘇法主のやうに俗っぽくないやうに思はれた。聴衆もなか／＼少くない。天幕の中に作つてあるローハ臺には、何でも二三百人位は居たらう。尻捲りもあれば肌脱ぎもあつたが、何れも團扇片手に熱心に聴聞して居る。殊に面白いのは、善女よりも善男の多いことで、若い男も随分澤山あつた。自分の郷里に、お寺でお賽銭を誤魔化したり、米を賣る時毎に儀に針を立て、は、南無阿彌陀佛々々と叫んで寺へ参る人が有つたが、此處に集つて居る人は此處のばかりではなからう、本當の善人も本當の信者も随分澤山有るだらうと思つと、此地を利用する坊さんと、此土地とを考へ合せて何となく頼もしいやうな氣がした。

其處を通りぬけて元の順路の方へ戻らうとすると、何やらの銅像が頻りに水を噴いて居る。十三夜の月が皎々と照り渡つて、銅像の半面がキラ／＼と銀色の光を放つ。高く弧形を畫いて輝きつゝ、動くともなき水の飛沫は、落ちて臺石を打つに至つて、再びキラ／＼と光つてパチ／＼と騒ぐ。えも云はれぬ光景にわがれて暫し佇んで居ると、冷しい微風がヒヤリ／＼と身に迫る。

晝の面影は何處へ行つたらうと思はるゝ、花屋敷の淋しい前を通りぬけて、池に沿ふて左へ曲ると、流石に此處は淺草で有る。晝と夜との差別がない。不夜城とは吉原ばかりの名であるまい。いや軒と云ふ軒、見せ物と云ふ見せ物は一つとしてイルミネーションで飾り立てざるものなく、晝を欺く所ではない。汚ないものゝ見えぬ丈に晝よりも遙かに美しい。おゝ其美しい輝きが池の水に映つた美しさ、全く晝で有る。そして何の見世物も晝と同じやうにドンチャン、ブカ／＼樂隊で囃し立てゝ客を呼んで居る。晝の間は額に汗を擽つて、宵越しの金を使ふまいとする兄哥連や、晝間の手足を縛られた連中が、ヨイシヨ／＼と押懸け／＼と詰め込みので、何れもこれも皆一ぱい。必ずしも流行るのは活動寫眞ばかりではない。軒敷から云へば活動寫眞が一番多いが、常盤座でも外の小芝居でも皆滿員の盛況！夏の夜の淺草は斯うして何時ともなしに更けゆくので有る。

自分と友達と二人は何れへか人の少なうなるのへ入つて見やうと云つて、同じ通りを行きつ戻りつ、

此ならば人が少なうだ、七八年ぶりの玉乗も一興で有らう。輕業は駄目だが小さい子供までが危い玉の上に乗つてコロ／＼と巧に轉がる有様は、全く人間の世渡りと同様だ。昔の玉乗と今の玉乗の變化を見るも一興だらう。斯う思つて木戸口に立つと『へい四錢宛です』

中へ飛込んで上れと云ふまゝ、下足料一錢宛を拂つて危い棧敷へ上つて見ると、驚いたりな、玉乗と思つたは昔の夢で有つて、何とか三津五郎とか云ふ女役者一座の歌舞伎で有る。チツポケなお士が出た。やさしい聲の老翁が出る。いやはや見られたものではない。はてな！看板には確かに江川玉乗一座と昔ながらの大きな字が書いて有つたやうに思ふ。いや夢ではない。畜生こんなことをしてやで人を釣るのか、人を釣つて人を種にしてスケッチをやつて見やうと思つた身が却て種になつたか。怪しからぬ。と思つてると、煎餅のやうな汚ない薄べらな座布團をもつて来た、十四五の汚ない垢だらけな、それでも顔丈は白く塗り立てた女が、一枚二錢五厘つゝ頂きますと云ふ。木戸が四錢に下足が一錢、それから棧敷が二錢五厘、總計六錢五厘で上等のお客様で有る。客はと見ると滿場殆んど立錫の地もない位で、二階も下も團扇の音がパタ／＼パタ／＼とする。そして中にはペラ／＼するやうな羽織を着た男も居れば、バナマの擬か何かを冠つた男も居る。廂髪、丸鬘、必ずしも下町風のお客さんばかりではない。そしてそれが『あの奴本當に悪いやつだ』とか、『可愛想だわ』とか、頻りに力齧

を入れて一生懸命になつて七錢五厘のお芝居を見て居る。演劇の改良も何もあつたものではない。

いや七錢五厘と云つても決して馬鹿にすべきでない。『由良の港』と云ふに次いで、『尻捲り』とか『尻捲り』とか云ふ喜劇まで添つて居る上に、書割なども至つて涼しうに、麻か木綿かの暖簾で出来て居て、風が吹く度にフワリ〜と揺れ動いて、夏向には何とも申分がない。そして幕敷から云へば『由良の港』丈でも七幕十三場。下層社會の一夕の散財としては結構此上もないもので有る。安いより何より自分は難有くて、涙がこぼれさうになつてサツサと飛出した。

翌日人に聞いて見たら、玉乗は晝間丈で夜は芝居をするのださうだ。まい思々しい！ 本當に釣られたかい！（四十三年）

五月雨の上野

六月十六日

雨は朝からびしょ〜と降つた。丁度此日の午後で有る。自分は二十日に終ると聞いた白馬會を見に行つた。

上野公園前で電車を下りて、霧雨の中を公園の中へ進んで行く。時刻のせいの中へ入つて行くもの

は殆んどない。油の中の辨天さんへ下りる石段の下り口から瞰下ろして見ると、蓮の浮葉は殆んど池の面を蔽ひつめて、處ろ〜浮葉のないわたりの水の面が露の中に鈍く光つて居る。博覽會の第二會場の白い建物、夢のやうにぼうとして見えて居る。本郷の高臺の空の方から、黒い雲が上野の森の方へ動いて來つゝ、ある。其だのろい進みで有る。

ぼうとして立つて居ると上野の時の鐘がゴーン〜と二つ鳴つた。初の鐘の音がまだ残つて居る所へ、次の鐘が撞かれたので、鐘の内側で餘韻と餘韻とが衝突を起したやうに思はれた。

やがて二人は蝙蝠傘を、一人は雨傘をさして、何處かの中學生が三人石壇を上つて來た。根岸わたりに歸るのらしい。

『君、ゴットて云ふのは何か知つてるの？』

『ゴットか、ゴットは「得る」だ。』

『ぢや人形てな何と云つたけな。』

一年位の生徒だらう睦まじさうに此處ことを話しながら行つた。

中學生の後を追ふて交番の前まで來ると、巡查は淋しげに派出所の中でボカンとして腰をかけて居る、通る人もボツリ〜しかなないので、別段に見るものもないらしい。

白馬會の前まで行くと、下足番の女がサアと云はぬばかりに、飛立つて来て自分の傘を取った。會場の中はガランとして居る。雨天の爲か數へる程しか觀覽者は居ない。眼立つやうなの丈ぼつり〜と見て歩く。その中に昨日友入が云つた女看手は何處に居るだらうと思ひ出して、氣を配つて見たが一向に見えぬ。友人は斯う云つた。

『あの女が眼につかぬやうでは人間ぢやないさ。淺草邊とかの女で、何とかかとか云ふ噂が有るが、兎に角無邪氣な所が善いさ。僕は畫を見るよりもあの女を見る爲に何度行つたか知れぬ。が少しも飽かぬ。今朝も行つて見たが歸りたくなかつた。

自分は思出してからは随分氣を附けて見た。あれが見えれば人間でない時まで云はれる様な美人ならば、せめて一度は拜みたい、斯う思つて見たが一向に眼にとまらぬ。其處女看手は一人も居なかつた。『休んだのかしら』、とも思つたが、今日に限つてさうでもなからうと思ひなほして見た。がとら〜眼に附かなかつた。眼に附いたのは繪葉畫店の小女だ。十三か四か、粗末な風をしては居るが、眼元口元の愛嬌と云ひ、無邪氣な表情と云ひ、千金や萬金の價どころではない。繪葉畫を四五枚買つて自分は、序に『お前の繪葉畫はないか』と問ひたかつた。友人は此女と間違つてるのぢやないかしらと思つた。

一時間餘たつて會場を出た。六百五十七點と云ふゴチャ〜に並べ立てた水彩畫、油畫、眼星しゝのだけ見るにさへウンざりした。

白馬會を出ると、序にその兄弟分の隣の太平洋畫會へ入つた。これにも四百七十一點と云ふ作品が並べて有る。畫はとにかくに配列が餘りゴチャ〜して居ないので、白馬會よりも此方が心持がよかつた。第七室で有つたか若い男と女とが腰掛に腰をかけて、何か親しげに話しつゝ有つたが、自分の顔を見ると、ずうと立つてにげて行つたのを見て、白馬會の最後の室で女看手と學生とが頻りにしやべつて居たのを思ひ出した。

愈々兩方の會を見て出てから、さて頭に何が残つたと考へ直して見ると、白馬會の藤島武二の滯歐記念スケッチ數枚と、太平洋の鹿子木孟郎の習作と云ふ少女と位のもの、外にはまづくはあゝ、太平洋の北村四海の大理石像四つを見て、さつさの繪葉畫店の少女を思出した丈で有つた。

外へ出て見ると雨は全く止んで居た。そして行き交ふ人の數も大分に殖えて、角帽、洋服、女學生を始めとして、電報配達の自轉車も通つた。南から、北から、來る人も來る人も、皆急ぎ足に歩いて、先程からの惰性の爲か、大抵は皆傘をひろげた儘で肩にかけて歩いて居る。交番の巡査は派出所の前へ出る、石橋の上を彼方へ此方へ行きつ戻りつして居る。交番の後ろの『故小松宮殿下御銅像建設場』

と書いた板園の中からは、臺石を削るので有らう、柔さしい鑿の音が、チンカン〜と、頻りに群がり響いて木魂に和して居る。

丁度此時、時の鐘が四つ鳴った。行き交ふ人はやうやくに殖えて来た。俣の走り行く數も多くなつた。四時と云ふ時は坐つて居つた人間も動き出す時だ。陶宮術とやらでは、四時と云ふ時を以て一日中の最も危険な時とする。凡ての負傷などは多く此時刻に起ると云つて居ると聞いた事が有るが、成程さうかも知らぬと思つた。

チヨン盥を結つた額の禿げた老爺さんが、頸には箱のやうなものを背負つて、『本郷竹町若竹』と書いた傘をさして、時々空を仰ぎ見れば、自分の前をゆつくり〜歩いて行つた。霰が薄くなつて大學の時計臺が櫻の葉越しに見え出して居た。

上野と淺草

齋藤 綠 雨

上野は築きなされた公園なり、陰氣なる神の庭なり、貴族的なり、淺草は埋め立てられたる公園なり、陽氣なる佛の宿なり、平民的なり。上野は靴に石段を登るべく、淺草は雪踏に數石を行くべし。上野に多きは背廣なり、淺草に多きは三尺帯なり。

上野は樹木の公園なり、茶を喫するの公園なり、幽遠なるが故に、すなはち獨逸的なり。淺草は屋舎の公園なり、酒を呼ぶの公園なり、熱鬧なるが故にすなはち共樂的より。天然の色は上野に見るべく、人為の聲は淺草に聞くべし。前者はぶらつきなり、後者はおしあひなり。

上野は目の公園なり、眺望の公園なり。淺草は口の公園なり、飲食の公園なり。更におもふに、上野は行きどまりの公園なり、淺草は通りぬけの公園なり。

上野にありては神樂も厭世なり、淺草にありては念佛も樂天なり。上野の夕の鐘はしきりに歸るを促し、淺草の朝の鐘はひとへに來るを迎ふ。上野に遊ぶものはけふの課程のなほ了せられざるが如く、淺草に遊ぶものはあすの業務のはや廢せられたるが如し。上野は詩吟の公園なり、淺草は鼻唄の公園なり。

上野は黙してはいはず、淺草は語りてやまず。上野は詩の典雅なるものなり。淺草は文の俗惡なるものなり。上野は大氣の公園なり、沈靜の公園なり、やがて閑寂の公園なり。淺草は塵埃の公園なり、浮動の公園なり、やがて喧騒の公園なり。

上野は悠揚なり。淺草は狼藉なり。上野はあつらへの公園なり。居すわりの公園なり、紀念像の公園なり。淺草は仕入の公園なり、たちっはりの公園なり、のぞきめがれの公園なり。紙入と目的とをもたざるも上野には入るべく、藝口と手段とをもたざれば淺草には入るべからず。犯罪の一面よりいへば、上野は過去なり、過去を想はしむる公園なり。悔悟なり。淺草は現在なり、現在を想はしむる公園なり、構成なり。

上野は濡れる公園なり、涙の公園なり。淺草は乾ける公園なり、笑の公園なり。一は動物園に豎も狸々の叫びやすらむ。一は水族館に夜も赤鯉の踊りやすらむ。

上野は風流なり、死せる風流なり、古を見るべし。淺草は趣味なり、生ける趣味なり、今を見るべし。上野に鑲影の絶ゆることあれ

ども、淺草に夜香の飛くることなし。世は進歩とぞいふなる、舞臺とぞいふなる、なほおほいに開化とぞいふなる。以上は諸種の點より開化の公認に二機あるを示したるのみ。比較の始なり、判断の終にあらす。敢て拙筆の便宜を得むが爲に、こゝに無用の一語を添へむ。上野行は線ならざるべからず。淺草行は紅ならざるべからず。これを顛倒したるは無智なる馬車鐵道會社の過失なり。(わすれ貝)

玉川の鮎

鮎が食ひたくなつて、八月二十日の日曜の降りさらな午後を、パイと飛出して玉川へ行く。水道橋で甲武線電車に乗つて、新宿で乗り換へて山の手線電車で澁谷に着く。停車場を出ると時雨のやうな夕立がピリ〜と降出した。踏切りを越えて二丁許り行くと、石油箱のやうな細長い、玩弄物のやうな電車が二つ并んで居る。架空線を見ると市街のところが一本で有る。これが所謂玉川電鐵で有る。ぐるりを見ると場末!と云ふ感じがあり〜と頭に浮ぶ。前の『三軒茶屋行』と云ふ電車が出て、暫くすると『王川行』と云ふのが動き出した。電車の幅が狭いのでふらふら〜と揺れて進む。さるで東京の蒔蕪の一端を片手でつまんでフラー〜と振るやうで有る。乗つて居る砲兵の五六人が、『師團長が變るさうだ』『いつ變るのだ』『來年の七月だ』と云ふやうな呑氣な話をして居る。道玄坂とか何とか云つて、蒔蕪電車はチヨイ〜と停留する。兩側の町の光景

はまだ場末の光景で有る。白い女の顔が眼立つ。

十五分許り走ると、電車は三軒茶屋につく。此處を出ると最う場末ではない。町の光景はガラリと變る。路幅は半分になる。路の兩側は殆んど竹藪ばかりで有る。飛び〜に煤けたやうな藁屋根やそぎ葺の家がある。そしてその軒が皆電車の窓の下に見える『醬油酢』と筆太にかいた店口の障子が時々眼につく。『理髮舖』と云ふ字が『化粧屋』と變つて居る。女の顔が赤黒くなつて、素裸のたくましい男の脊が見える。竹藪のとぎれには水田が有る。黍、芋、茄子、清々とした野菜物の畑が見える。鶏がカッと云つてかけ廻つて居る。裏口に出て居つた二人の女が運轉手の顔を見て、小首をかたげて挨拶をする。蒔蕪電車はまだ勢をこめて藪の間を走つて居る。空氣がいやにしめつばい。蟬の聲が喧しくて自分の乗つて居る電車の響がちよつとも聞えぬ。其間に停留場が二つ三つあつたやうだが、其處には丁度便所位な小ぼけな待合所が出来て居た。

三軒茶屋から十五分餘りすると、南側の藪がカラツとなくなつて、眼界が忽ちパツと開ける。雨はもう止んで居る。五六町を隔て、白い水の光が見える。お、玉川河原の廣さよ!電車を下りて川端へ出ると、片側ばかりに茶屋が十二三軒も并んで居る。中には二三十人も客のあるのが有るが、二三人しかないのが多い。流れてなくなつたらしい橋の袂の河原では、砂利船が砂利を掘つては積込み、積

んで来た砂利をトロッコにすくひ上げては馬にひかせて何處かへ運んで居る。小さい屋根船が二つ三つ水を溯つて行く。橋跡の下の方では渡し舟が荷車や馬を積んで幾度も行つたり來たりする。渡し舟から上つた人は水の巾の三倍もあるやうな向河岸の砂利の中をトボリと歩いて行く。荷車は大抵二人が、りでエイヤと押されて行くのが見える。流れがなか／＼に急なので、時々流して來る筏舟が見る／＼其姿をかくして了ふ。對岸にも河上にもこれぞと云つて見るやうな景色は何にもない。

茶屋に上つて鮎鮎が食ひたいと云ふと、『お氣の毒様鮎はちつとも捕れませぬ』と云ふ。

『夕べの花火で皆食つたのか、買つて行くものもないか。』

『幾度となく水が餘りに出たので、今年は駄目なんです、そして捕れてもちつちやいのです、本當に御氣の毒様ですわ』口の甘い女中は矢張都の風にもされたので有らう。

さうしてとう／＼鮎の顔も見せなかつた。矢張玉川は鮎の名所ぢやない、砂利の名所だらう、けれども月の玉川は何とも云へぬ趣が有るだらう、斯んなことを思つて又降りさうな空をあとにしてやがて引返した。水道橋に歸つて來た時、都に囚はれて居るものは矢張都の色がいゝ、自分は矢張俳人ぢやないと思つた。

夕涼み筏に乘つて面白き
夕立や馬が舞する渡し舟

鮎は名に聞けよとばかり日ひけらく
玉川は砂利の名所よ鮎細き
藪を出て廣さよ月の玉川原
水涼し玉川砂利は玉のやう

井の頭の紅葉

久しぶりで田舎の景色の見たさに、此前の日曜の歩けば額に汗のにじむと云ふ午後を、井の頭の紅葉を目的にコッソリと昌平橋驛に馳け附けた。どうせ乗り換と云ふので中野驛まで電車で行つて汽車を待つ。暫く待つてる間に、後から／＼と電車を降りては待合せの客が五人十人と次第々々に殖えて行く、平生よりは客が多いがと思つたが、何故だらうと尋ねるでもなくボカンとしてる内に汽車が來た。押し込まれる様にしてヤツとの事で乗り込むと、忽ちにして汽車は心地よげに武藏の平野を西へ／＼と進む。碧空鏡の如く澄んで一片の雲もない。瑞々として美はしき足り穂の稻は未だ全く刈り盡されず、大方の樹々は皆既に錦を飾りて妍を競うて居る。午後の日の光は此等に方つてキラ／＼と照り輝

いて、見渡す限り下界は今一面に黄金を布きつめたやう。吹く風も都の巷とは變りて流石に身に沁む。秋は深い一と思ふと同時に自分は夢の中の人の様になつて、此景此趣を遣にし得る今の身に詩を感じて、せめて一瞬！で宜いから、絶えず都の塵に醒醒として居る人を此境に立たせてやりたい、此樂を分ちたい！と思つた。そして斯座空想に耽つて居る間に、汽車は何とか驛を過ぎて吉祥寺に着いた。中野を發して丁度二十分である。

驛を出て田甫路を進むこと二丁許、鬱蒼として茂つた杉の小森がある。森をぬけると直に池がある。これ即ち昔の神田上水の水源で有つて、三十三年東京市の水道の成るに至るまで、三百餘年の間市民が依つて以て命を繋ぎ得た源である。水永へに澄みて先づ吾が心を洗ふの感がある。家康江戸に入るの翌年關東の各地を巡歴し、此處に來つて玲瓏玉の如き此水を發見し、手づから之を汲み取つて茶を點じ、これ關東隨一の水なりと謂つて直に之を引きて城内の「お茶の水」に用ふると同時に、之を市民の飲料水とすべきことを命じたるは、流石に家康なればこそと頷かるるのである。始め家康は此池を府民の爲に命の親なれと云ふ意より「親の井」と命じたが、家光に至つて之を井の頭の池と改めたので有る。

仰げば丘上の楓樹其數十數株に過ぎざれども、今を盛りと唐紅に炎えて、眺むる人の血潮をして

没るに湧き立たしむるので有る。殊に其中の最大なる二三株の如きは、影を寫せる水の色と相映するが爲か、さては單に夕日の光の之に輝くが爲か、抑も又何等かの故あつてか炎ゆるが如き紅の色は一種の鮮かなる光と艶とを現はして、自分は未だ嘗て斯の如き麗はしき紅葉を見た事がないと思ふと同時に、詩人ローウエルが歌ふ所の「白露漸く霜と凝りて月の桂の影の夜毎に牙え行けば、葉毎々々の眺の中に春の血潮は炎えて湧き立ち紅葉悉く錦を飾りて、晩秋の色夕榮の光をして顔色なからしむ」てふ紅葉の歌を憶ひ出さるを得なかつた。そして暫く茫然として立て居ると、嬋妍たる一美人忽然として眼前に現れ、靜に蓮歩を運で紅葉ゆる紅葉の上を吾に向つて進み來るので有る。此れぞローウエルの他の紅葉の詩に所謂「曙の空の色と光榮を争ふ樹々の錦の上を、辿り來る懐かし床しの姫の姿」かと思ふうちに、美人の姿は直に消え失せて了つた。

そも此美人、床しの姫とは何者であらう、實を云へば自分は七八年前一度友と自轉車を驅りて此地に遊んだ事がある。そして其時茶店の老婆に就て色々話を聞いた。池の中に祭る所の祠の本尊は辨才天女である。そして其天女の像は傳教大師が一刀三禮の作で有つて、源氏の先六孫王經基が任に此國に在る時、偶々夢に辨天を夢みて此處に安置したもので有ると云ふ話。それから又源頼朝が募兵の使者安達盛長が此處に憩ひて「頻に計略を巡らし、思慮未だ決せざる時忽然として一人の美人立現

れ盛長に告て、我汝が志願尤大なる事を知る、必ず本意を達すべし苦慮することなれ斯く謂ふ我は源家の厚く信仰し給ふ開運天女の使なりと語り終りて忽ち失せた」と云話。降りて寛永八年の夏國內大に旱魃し、此池亦渴して一滴の水なきに至たので、時の將軍家光「東叡山慈眼大師を請じて池水涌沸の修法を仰せられ、即ち近郷の僧尼數百人を集め、此處に於て七日の間七ヶ所に水加持修行有ければ、忽然として雲霧大麗をつみ、雷電氷雹沛然として波浪池中に巻き、龍水活潑として七ヶ所の加持口より漲り出で暫時に彌漫して恰も大湖の如く成つた」此等は皆天女の感應で有ると云ふ話。斯んな話を聞いた時は自分は此池の何處までも女性的で有つて、羨望とした小森の中にくねりくねつて、永しへに澄み渡つた水の底には、水苔の一つ一つさへ數へ得べく、嵐は梢に狂ふとも水面には漣も立たぬと云ふ姿は、何んとなく池中に祭られたる神と誠に善く照應して居ると思つた。そして夫れから夫れと考へた果に自分の頭に浮んだのが、優しい美しい辨天の姿で有つた。爾來自分は此の地を懐かしい床かしい土地の一つに數へて居つた。今自分の眼前にありくと浮んだ美人の姿は此れで有る。傳説から来る色々の連想が生んだ辨財天で有る。自分の此地に對する印象は斯くして又其深さを加へた。

色んな事を想ひながら一段高い丘に上つて見ると、天氣の好いのと折柄の日曜とで來遊の客もなかなか少くない。中野で乗つた客は大方皆此處へ來るので有つた。晝板と腰掛とを携へて寫生に出かけたものも十人二十人ではなく、寫真機を擔ぎ歩いてるものも二人や三人ではなかつた。「高尾山に優ること萬々だ、高尾の繪はがきは買ふ氣にはなれぬが、此處の繪はがきは買つて行きたい」と云ふ聲が四方に聞える様で有つた。では自分も一組繪はがきをと思つて茶店で尋ねて見ると、五枚一組の中の最も景色の美しいのが一つもない。書生さん方が皆取つて行きましたと云ふ。買ふものも買ふもの、賣るものも賣るものではないか。それは兎に角に今は汽車で割引中だし、新宿から僅かに三十分餘りの近距離で有るから半日の清遊には此上もない土地で有る、殊に停車場を下りてから僅かに三丁許りで有るから、天氣の何のと謂ふべきではない、雨の紅葉も却て趣が有らう。(四二、一一、一四日記)

ル、ドの洞窟

今より丁度五十三年前西暦千八百五十八年我安政六年の二月十一日佛國ル、ドと云ふ處に耶蘇教の所謂奇蹟が有つた。
 ル、ドと云ふ町は佛國ポトビレネー州の片ほとり、丁度パレネ山の麓に在る小さい町で有る。此町の近所を流れるガジ河の邊りにマッサピエルと云ふ大きな巖が有る。其巖の中に小さな洞窟が有る。

ル、ドの町に住んで居る水車屋フランシスコ、スビルと云ふもの、總領にベルナデッタと云ふ娘の子
 が有つた。丁度五十三年前の二月の十一日のこと、ベルナデッタはマツサビエルの洞穴へ行つて見る
 と、突然地響がして、ハツと思ふと同時に洞穴の中から光が出て来る。暫く凝視して居ると其處には聖
 母マリヤが立つて居る。其後聖母マリヤの立つて居た岩角から泉が湧き出した。ところが湧出した泉の
 水は萬病に奇效があると傳へられて、遠方から色んな病人が續々と押かけて来るやうになつた。そし
 て病氣はまた實際に治るので有つたが、學者が色々な分析を行つて見ても結局其理由は分らなかつた。
 が、實際に効験の著しいもので有ると云ふことは色々と證明された。斯うなつて來ると政府の干渉
 も警察の力も何の役にも立たず、外國からまで盛んに巡禮者が來ると云ふことゝなつた。是に於てか
 ナ翁三世は遂に洞窟の禮拜と泉水の飲用を公然と許可するに至つた。

其後伊太利にも第二のル、ドが現はれ、露國のキロブにも第三のル、ドが現はれ、何れも萬病を治
 する力を有つて居ることが分つた。かくして露國のル、ドへは露國皇帝の態々の臨幸さへ行はれた。
 からなつて來ると宗教家は之に色々な迷信を結付けて基督以來の奇蹟で有るとか、發見の少女はオ
 ルレアンの少女と同様に神女で有るとか、盛に宗教の方面に利用したので有つたが、今より十一年に
 至つて、佛國巴里のソルボン大學教授キユーリー氏によりて、ラヂウムの發見するに至りて、此靈

泉の効験も遂にラヂウムの含まれて居る爲と解決するゝことゝなつた。

斯うして見ると宗教上からは何の難味もないものとなつたが、それでも猶宗教家には何かの爲と
 なると思つて、ル、ドの洞窟の模造は到る處に造らるゝことゝなり、肥前の五島の中玉村、備後の福
 山、名古屋などにもそれが出來た。けれども全くル、ドの洞窟と同一型に出たものはないと云ふので
 今度小石川區關口臺町十九番なる玫瑰塾の後庭の廣場に、全然ル、ドのそれに型どつた同形同大の
 純粹の模造が築かるゝこととなり、今年それが竣成を告げて五月の二十一日と云ふに其聖別式と云ふの
 が行はれた。思ふに此目白臺に於けるル、ドの洞窟と云ふものも今後或方面に於ける名物となること
 で有らう。

模造の洞窟と云ふのは地上に築きあげた一個の洞穴で有つて、基底から天井まで最も高い處が二丈
 三尺、入口からの奥行が三丈九尺、横幅三丈七尺で有つて、其右前の岩角にはマリヤの像が立つたも
 ので有る。像の丈は五尺餘りで、服装の色彩は少女ベルナデッタが語つたと同じ色で、始めてマリヤ
 出現の當時に於けると同じく聖母の足許には薔薇の一株が植えて有る。

東京年中行事 下の巻終

正誤

本書上の巻一五二頁「二月曆」中左の誤植あり、

△深川八幡祈年祭……は十四日の下に

△日本橋小傳馬町祖師堂にて日蓮上人降誕會……は二十一日の下に入る。

上の巻に對する主なる世評

△萬朝報の批評 東京の年中行事を知るに江戸歳事記で事をすまさんとする者あらば、これ木で鼻を括らんとする者ならずや。東京に東京年中行事なくば恥かしと云ふべし。幸に著者大奮發にて三年がかりにて此書を著はし、疑性の男として内容杜撰にあらず。剣いだ狸の皮だけを算用するといふ方針ゆゑ、事實の正確云ふに及ばず。さりとて新しき人なれば、例の考證など云ふ方面はよい加減にサツサと切上げて、簡潔に明快に立派に現代の東京に肉薄したるは流石也。俳句の癖ある人として各項句を引くこと五六乃至三三〇、此點に於て此書は一種の俳諧東京年中行事記といつても可い。「は正にその通りにて豪氣也。加ふるに三十葉に餘る木板全頁の挿繪は小林永二郎君の研究に成り、寫生の中に洒脱の趣を含めて、從來のものを選と異にす。東京に在る者、在りし者、在らんとする者、在らずして在るが如くに知らんとする者、みな一本を備へて可也。上巻は一月より四月迄を收めたり。

△東京日々新聞の評 東京の年中行事も昔ながらに廢れざるものと新に起れるものとを數ふれば中々に多し。此書殆んど之れを悉し得たりと云ふべく、説明又詳細、季に應じて載せたる俳句も豊富なる挿畫もとりくに面白く、東京生活の一半を知るにも便利なる書なり。

△東京毎日新聞の評 卷頭に挿める寫眞十數葉、東京の風俳を寫し、内容は一月より四月迄の行事を細大となく網羅し、平易なる文を以て記述する。一項毎に俳句を添へたるは興味を深からしむ。明治風俗の資料として後世まで便とせらるべき好著なり。

△東京朝日新聞の評 若月紫蘭氏の著なり。新時代に起りたる年中行事もあれど、多くは維新後一時廢れ若くは廢れかけたる年中行事の、漸く復興し始めたる此三四年間の事實を敍したるものにて、物によりて事によりては江戸時代若くは其以前の風習も敍せり。一部の歳事記として人慕の變遷を知るに便なる書なり俳句を引けるは悪からねど少し多きに過ぎずや。

△日本新聞の評 東京の年中行事には昔ながらに廢れざるものと新に出來たものとある。著者は此等新舊の年中行事を實地踏査の上で書いてゐる。季に應じて俳句を載せたるも面白く、數十枚の挿畫亦趣味あり。地方にありて東京を知らんとする人、東京に在りて東京を知らざる人、又は知らんとして知るに暇無き人の座右に缺く可らざる良書である。

△讀賣新聞の評 表装からして先づ氣にいつたり。年中行事記或は歳事記の類數多くあれど之は又一新機軸をなせるもの。その題寄に『この書を俳人にして今の東京年中行事の内容を知らんとする人、地方にありて東京を知らんとする人及び東京に在りて東京を知らざる人、又は知らんとして

知るに暇なき人に獻ぐ』とあり。以てその内容の一般を窺ふに足る。

△二六新報の評 明治聖代になつてから、年中行事に關する書冊の公にされたものが二三ではないが、何れも皆粗雜簡略なものか。昔の古い事を主としたもので、現代を主として書いたものはない。著者乃ち茲に見る所ありて、現代の東京に年々繰返されつゝある行事を主として各方面から東京を研究せんとした、本書は此點に於て年中行事記たり歳事記たると同時に、東京研究の唯一材料と云ふべきであらう。江戸趣味の漸く廢れんとして居る時代に斯る書の表はれたるは喜ぶべきである。

△國民新聞の評 江戸砂子や紫の一本でもあるまじと著はしたる新江戸名所記なり。歳事記なり。人好きさうな小林氏の畫を挿み、今日殘る江戸風俗の今昔を古記を抜書して今日と合する手際も氣が利きたり。大部なれど重寶なり。文章も輕くて之に適す。

△俳味の評 東京の年中行事を一々親しく觀察して、これを寫生し、由來を説き、繪に示し、其をうたへる俳句を示せり。この上の巻は一月より四月に至る。なほ附録に東京の趣致をその特殊の事物に就きて説けり。新しき俳諧の歳事記は随分試みられたり、又東京の描寫研究もこの頃頻りにおらはる。この書はこの二線の合したる點より生じたるもの、しかも既刊書中最も要領を得最も眞摯なるものなり。これに倣うて京都年中行事、大阪年中行事等續々出でむを望む。

△婦女界の評 其由來を説き現狀を示し、繪に俳句に其面影を忍ばせ、附録には東京特有の事物を説明し、所謂東京趣味が描寫してある。既刊の歳事記類と違つて著者が一々親しく觀察して實況實物を寫生されたのですから最も信憑すべき著書といつて宜らしい。東京を知らうとする人には趣味ある最も恰好の書物であります。

△ホト、ギスの評 現代を主とした年中行事を書いた第一の書で有る。現代日本の文明の中心たる首都の年中行事はやかた新しき日本の精髓を語るものと云つて差支ない。書中早稻田大學擬國會、日比谷大神宮の結婚式等の項あるを見ても、本書の性質の如何なるかを知ることが出來やう。挿入した木版の畫など賑やかで有る。

△新婦人 江戸年中行事を今様に書き、之に舊年中行事を引用したる者、挿圖寫真版等多く、讀みて一種の趣味を感ずる好著なり、本書は其上卷なるを以て、一月より始て四月に終る、附録として電車八景、活動寫真、自働辻占、日比谷大神宮の結婚式等を收めたるは面白し。

明治四十四年十二月十七日印刷

明治四十四年十二月二十日發行

東京年中行事 下の巻

(實價金壹圓四拾錢)

著作者 若月保治

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田靜子

東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

印刷者 金崎金平

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

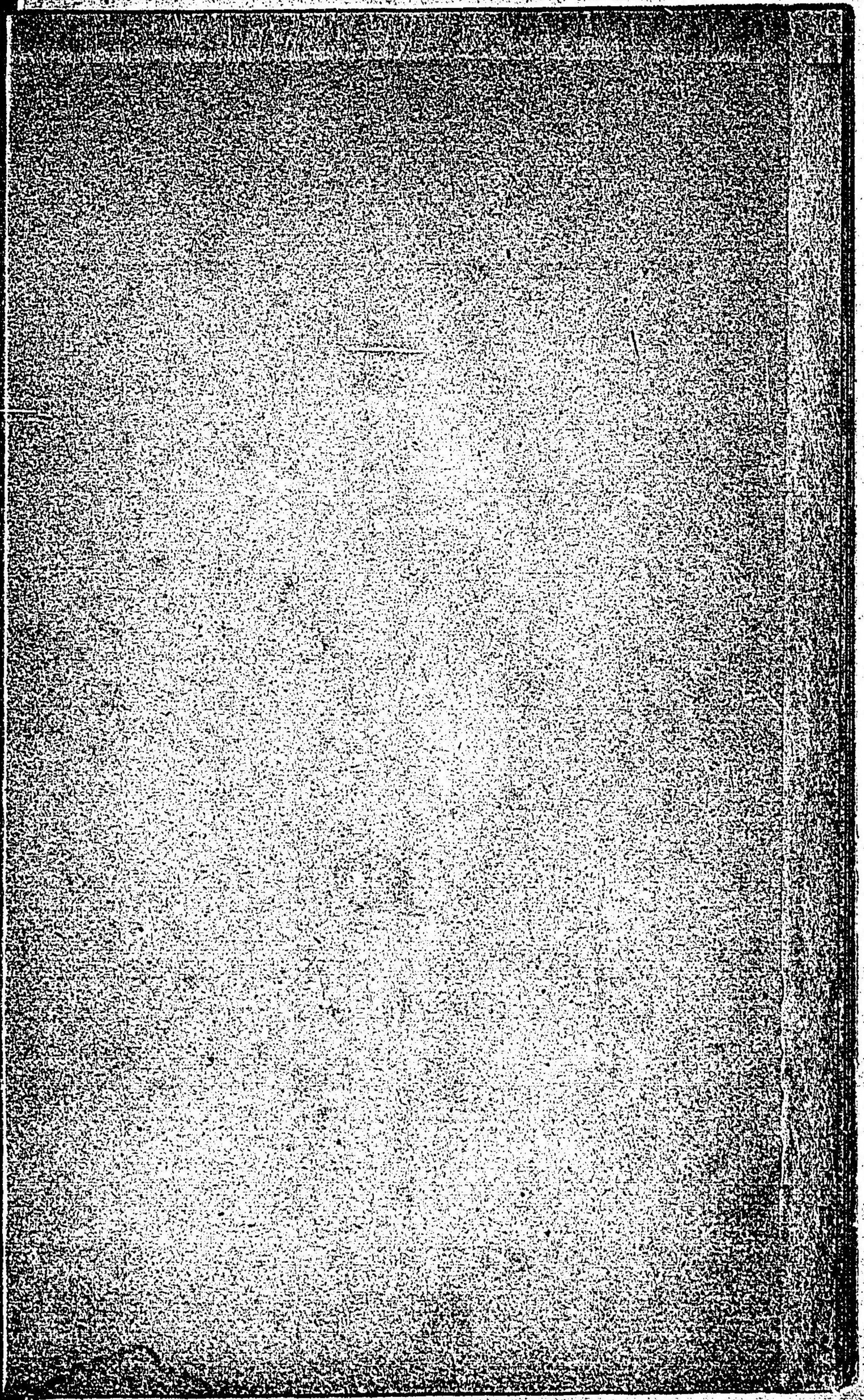
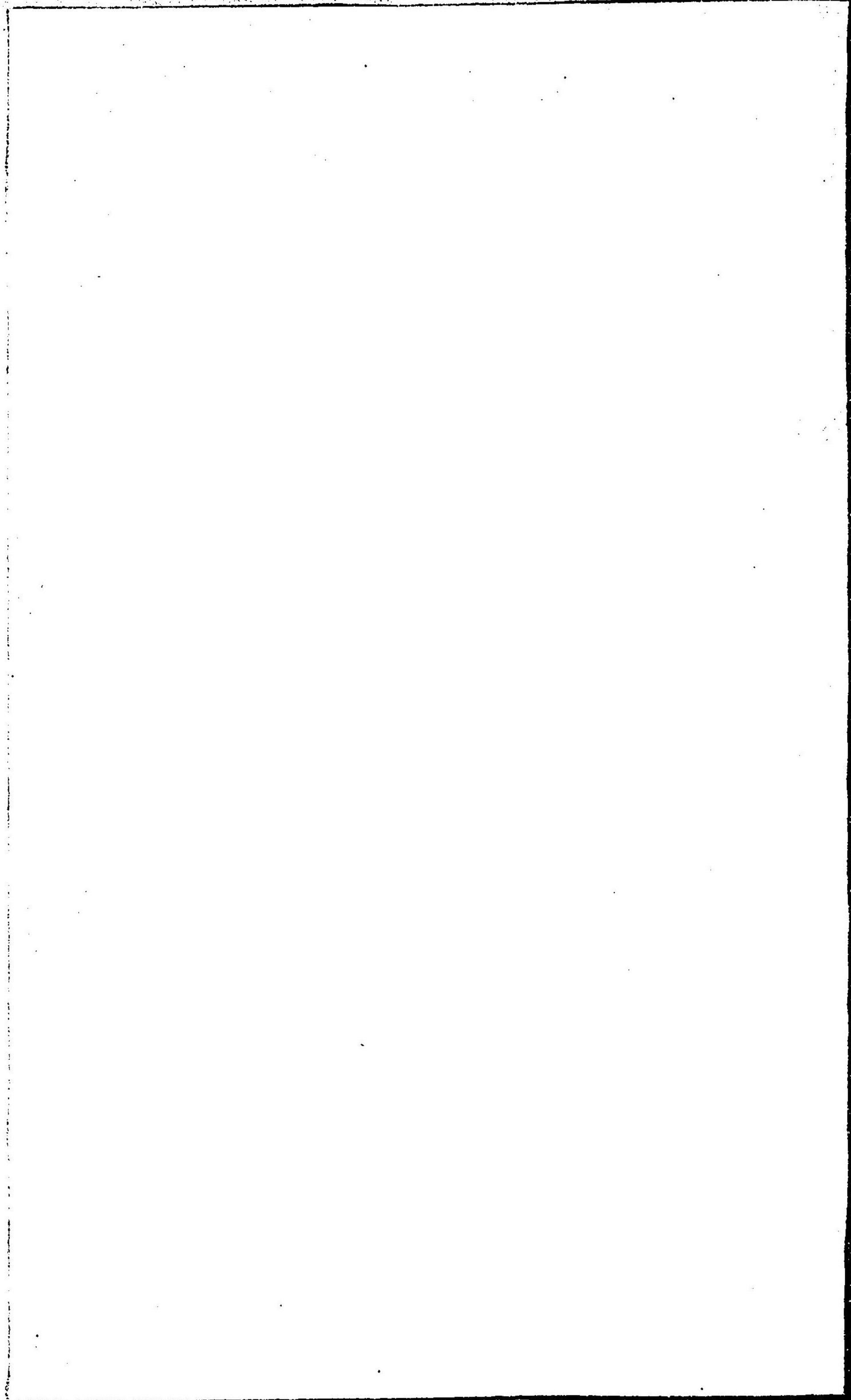
印刷所 東洋印刷株式會社

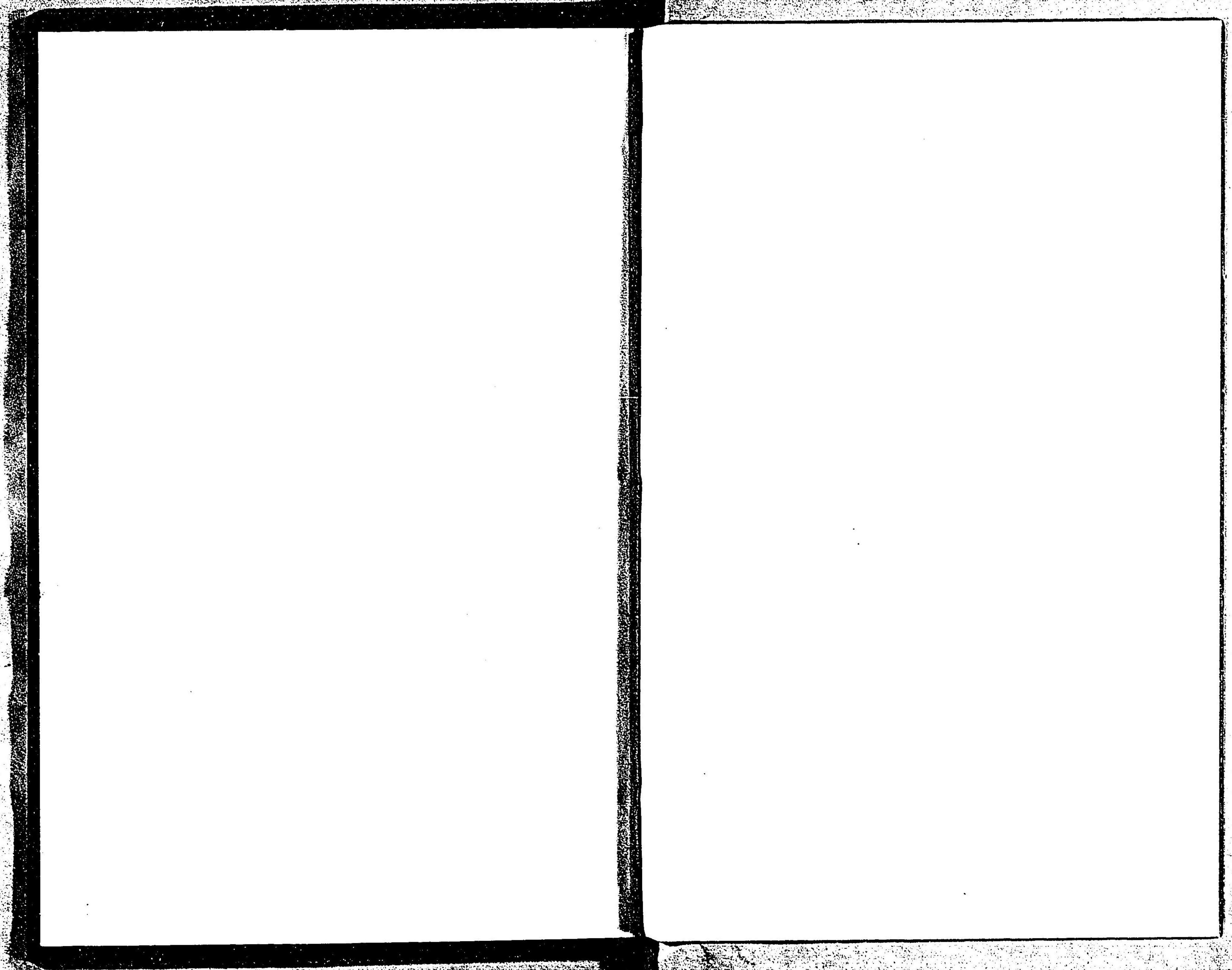
東京市日本橋區通四丁目五番地

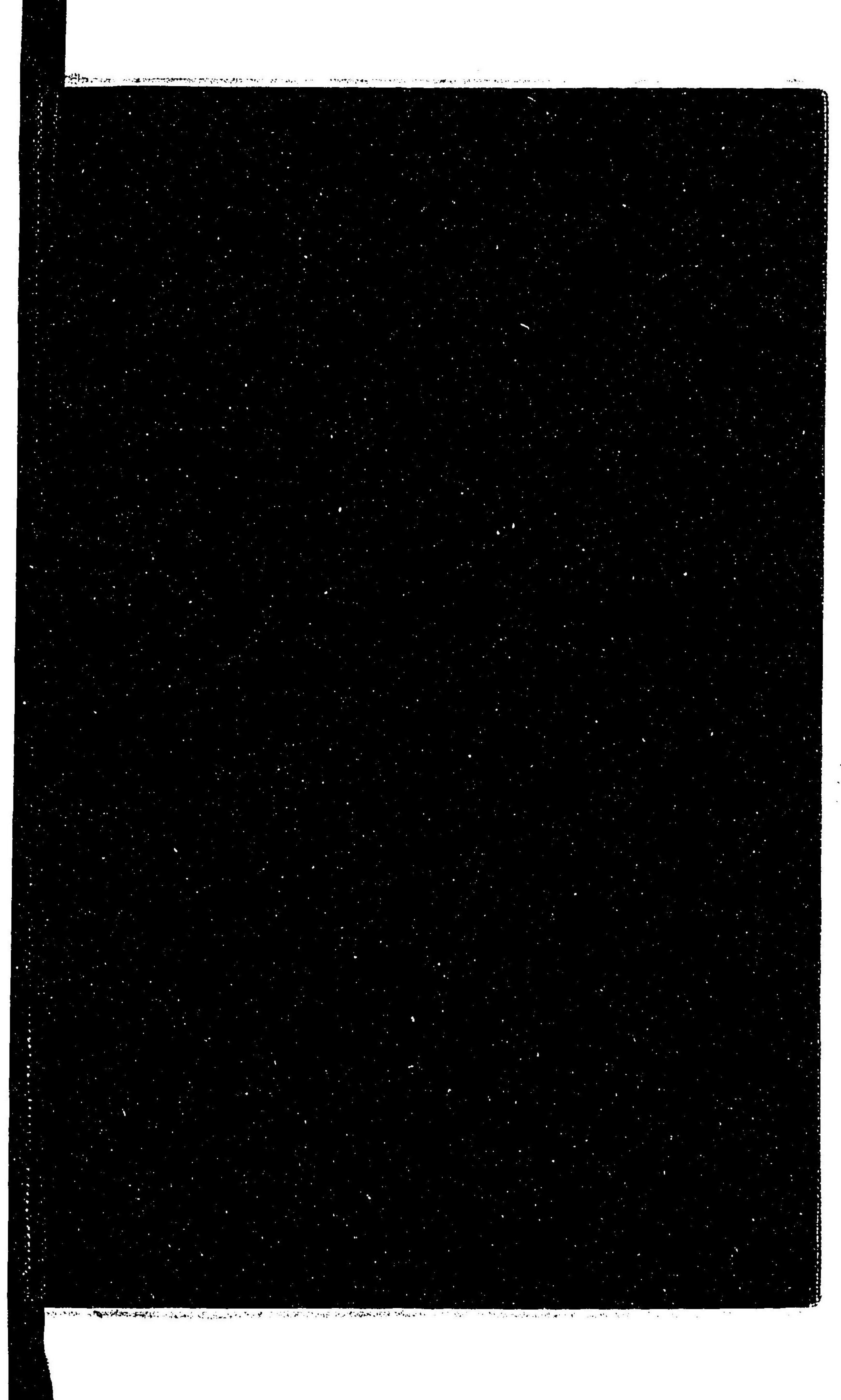
發行所 春陽堂

電話本局五一七
振替口座東京一六一七









385.8

W3T6

(M)

